

基本計画書

基本計画									
事項	記入欄							備考	
計画の区分	学部の設置								
フリガナ設置者	カッポホクサン ニシヤマトカクエン 学校法人 西大和学園								
フリガナ大学の名称	ヤマダガク 大和大学 (Yamato University)								
大学本部の位置	大阪府吹田市片山町2丁目5番1号								
大学の目的	大和大学は、教育基本法及び学校教育法の定めるところに基づき、高い専門性と幅広い視野を授けるとともに、豊かな人間性を涵養し、一人ひとりの「ひと」を見つめ、学術文化の向上と社会の平和と発展に貢献する有能な人材を育成することを目的とする。								
新設学部等の目的	社会学に関する理論、知識を活かし、社会が抱える課題の解決に意欲的に取り組み、社会の発展と幸せな暮らしの創造に貢献する人材を養成する。								
新設学部等の概要	新設学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	
	社会学部 (Faculty of Sociology)	年	人	年次人	人		年月 第年次	大阪府吹田市片山町2丁目5番1号	
	社会学科 (Department of Sociology)	4	200	—	800	学士(社会学) (Bachelor of Sociology)	令和3年4月 第1年次		
計		200	—	800					
同一設置者内における変更状況 (定員の移行、名称の変更等)	該当なし								
教育課程	新設学部等の名称	開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
	社会学部 社会学科	講義	演習	実験・実習	計	124 単位			
		142 科目	22 科目	7 科目	171 科目				
教員組織の概要	学部等の名称		専任教員等					兼任教員等	
			教授	准教授	講師	助教	計	助手	
	新設	社会学部 社会学科	15人 (11)	6人 (4)	0人 (0)	0人 (0)	21人 (15)	0人 (0)	25人 (8)
		計	15 (11)	6 (4)	0 (0)	0 (0)	21 (15)	0 (0)	—
	既設	教育学部 教育学科	25 (18)	9 (15)	0 (9)	0 (0)	34 (42)	0 (0)	5 (20)
		保健医療学部 看護学科	6 (4)	3 (3)	12 (5)	0 (7)	21 (19)	0 (0)	15 (14)
		保健医療学部 総合リハビリテーション学科	8 (7)	4 (5)	6 (7)	0 (0)	18 (19)	0 (0)	38 (14)
		政治経済学部 政治行政学科	6 (3)	3 (0)	3 (2)	0 (0)	12 (5)	0 (0)	30 (44)
		政治経済学部 経済経営学科	6 (4)	2 (1)	4 (2)	0 (0)	12 (7)	0 (0)	30 (46)
		理工学部 理工学科	21 (21)	6 (5)	4 (4)	1 (1)	32 (31)	0 (0)	20 (18)
分	計	72 (57)	27 (29)	29 (29)	1 (8)	129 (123)	0 (0)	—	
	合計	87 (68)	33 (33)	29 (29)	1 (8)	150 (138)	0 (0)	—	

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計					
	事 務 職 員		16 人 (16)	17 人 (17)	33 人 (33)					
	技 術 職 員		13 (13)	0 (0)	13 (13)					
	図 書 館 専 門 職 員		1 (1)	4 (4)	5 (5)					
	そ の 他 の 職 員		0 (0)	0 (0)	0 (0)					
	計		30 (30)	21 (21)	51 (51)					
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計	西大和学園中学・高等学校 (必要面積18,120㎡) 白鳳短期大学 (必要面積7,100㎡) と共用 借用面積：37,554.88㎡ 借用期間：23年				
	校 舎 敷 地	25,907.16㎡	0 ㎡	48,773.43㎡	74,680.59㎡					
	運 動 場 用 地	7,400.64㎡	11,858.00㎡	14,232.00㎡	33,490.64㎡					
	小 計	33,307.80㎡	11,858.00㎡	63,005.43㎡	108,171.23㎡					
	そ の 他	4,246.88㎡	0 ㎡	6,436.15㎡	10,683.03㎡					
	合 計	37,554.68㎡	11,858.00㎡	69,441.58㎡	118,854.26㎡					
校 舎		専 用	共 用	共用する他の 学校等の専用	計					
		35,674.41㎡ (35,674.41㎡)	0㎡ (0㎡)	0㎡ (0㎡)	35,674.41㎡ (35,674.41㎡)					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体				
	34 室	40 室	69 室	4 室 (補助職員3人)	1 室 (補助職員一人)					
専 任 教 員 研 究 室		新設学部等の名称 社会学部 社会学科		室 数 22 室						
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	学部単位での特定不能なため、大学全体の数。図書1,000冊、学術雑誌14種、視聴覚資料32点、機械・器具334点を追加。		
	社会学部 社会学科	34,626 [2,328] (33,626 [2,328])	139 [29] (125 [28])	31 [31] (31 [31])	755 (723)	16,968 (16,634)	85 (85)			
	計	34,626 [2,328] (33,626 [2,328])	139 [29] (125 [28])	31 [31] (31 [31])	755 (723)	16,968 (16,634)	85 (85)			
図 書 館		面積	閲覧座席数	収 納 可 能 冊 数		大学全体				
		770.93㎡	115席	75,200冊						
体 育 館		面積	体育館以外のスポーツ施設の概要							
		906.52㎡	特になし							
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	経 費 の 見 積 り	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	図書、設備購入費は、図書購入費には電子ジャーナル、データベース、その他の経費を含む。
		教員1人当り研究費等		300千円	300千円	300千円	300千円	一千円	一千円	
		共同研究費等		3,000千円	3,000千円	3,000千円	3,000千円	一千円	一千円	
		図書購入費	4,932千円	1,334千円	1,334千円	1,334千円	1,334千円	一千円	一千円	
	設備購入費	81,200千円	500千円	500千円	500千円	500千円	一千円	一千円		
	学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
		1,150千円	1,170千円	1,170千円	1,170千円	一千円	一千円			
学生納付金以外の維持方法の概要			私立大学等経常費補助金、資産運用収入、雑収入等							

既設大学等の状況	大学の名称	大和大学							
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
	教育学部	年	人	年次人	人		倍		大阪府吹田市片山町2丁目5番1号
	教育学科					学士(教育学)	1.04	平成26年度	
	初等幼児教育専攻	4	100	5	410		1.01		
	国語教育専攻	4	90	(3年次)	0	360	1.07		
	数学教育専攻								
	英語教育専攻								
	保健医療学部						1.06		
	看護学科	4	100	0	400	学士(看護学)	1.13	平成26年度	
	総合リハビリテーション学科					学士(保健医療学)	1.01	平成26年度	
	理学療法専攻	4	40	0	160		1.20		
	作業療法専攻	4	40	0	160		0.95		
	言語聴覚専攻	4	40	0	160		0.89		
政治経済学部						1.02			
政治行政学科	4	40	0	160	学士(政治行政学)	0.92	平成28年度		
経済経営学科	4	80	0	320	学士(経済経営学)	1.07	平成28年度		
理工学部						-			
理工学科	4	230	0	230	学士(理学)、 学士(工学)	-	令和2年度		
大学の名称	白鳳短期大学								
学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地	
総合人間学科(2年課程)	年	人	年次人	人		0.99		奈良県北葛城郡王寺町葛下1丁目7番17号	
国際人間学専攻	2	-	-	30	短期大学士(こども保育学)	-	平成14年度		
こども教育専攻	2	100	0	200	短期大学士(こども保育学)	0.90	平成14年度		
総合人間学科(3年課程)						1.13			
看護学専攻	3	100	0	280	短期大学士(看護学)	1.15	平成17年度		
リハビリテーション学専攻	3	40	0	120	短期大学士(リハビリテーション学)	1.08	平成19年度		
理学療法専攻									
リハビリテーション学専攻	3	30	0	70	短期大学士(リハビリテーション学)	1.11	平成28年度		
作業療法専攻									
附属施設の概要	該当なし								
									令和2年4月より 学生募集停止
									令和2年度入学 定員増(10人)
									令和2年度入学 定員増(10人)

教育課程等の概要																
(社会学部社会学科)																
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
共通基礎科目	視野形成科目	哲学入門	1・2後	2			○								兼1	
		倫理学入門	1・2前	2			○								兼1	
		心理学入門	1後	2	2			○			1	1			兼1	
		日本人論	1・2後	2	2			○			1					
		伝統と文化	1・2前	2	2			○			1					
		ことばと文学	1・2前	2	2			○			1					
		法律学入門	1・2後	2	2			○							兼1	
		日本国憲法	1・2前	2	2			○							兼1	
		人間関係論	1・2後	2	2			○			1					
		数学入門	1・2前	2	2			○							兼1	
	物理学入門	1・2後	2	2			○							兼1		
	化学入門	1・2前	2	2			○							兼1		
	コンピュータ入門	1・2前	2	2				○						兼2		
	統計学入門	1後	2	2			○			1				兼2		
外国語科目	英語 I	1前	1					○			1					
	英語 II	1後	1					○			1					
	英語 III	2前	1	1				○			1					
	英語 IV	2後	1	1				○			1					
	英語演習 I	3前	1	1				○			1					
英語演習 II	3後	1	1				○			1						
保健体育科目	スポーツ	1通	2	2					○					兼1		
キャリアデザイン科目	キャリアデザイン I	1通	2					○			4	4				
	キャリアデザイン II	2通	2					○			1	4				
	キャリアデザイン III	3通	2					○			2	3				
	キャリアデザイン IV	4通	2					○			2	3				
小計25 (科目)			—	20	24	0		—			8	6	0	0	0	兼10
専門教育科目	基礎科目	社会学入門 I	1前	2			○				2					
		社会学入門 II	1後	2			○				2					
		現代と社会	1前	2			○				1	1				
		社会とメディア	1前	2			○				3					
		社会と心理	1前	2			○				1	1				
		社会と歴史	1後	2			○				1					
		社会と文化	1後	2			○				1					
		社会と環境	1後	2			○				1					
		社会調査入門	1前	2			○				3					
		データ分析	1前		2						1					
		社会調査方法論	1前	2	2			○			2					
		社会統計学	1後	2	2			○				1				
		量的調査法	1後	1	1				○		1					
		質的調査法	1後	1	1				○		1	1				
		社会調査実習	2通	2	2					○	2					
		人文地理学概論	2前	2	2			○			1					
		自然地理学概論	2前	2	2			○			1					
		地誌学概論	2前	2	2			○			1					
		日本史概論	2前	2	2			○			1					
		外国史概論	2前	2	2			○			1					
	政治学概論	2前	2	2			○			1				兼1		
	経済学概論	2前	2	2			○			1						
	人文地理学	2・3後	2	2			○			1						
	自然地理学	2・3後	2	2			○			1						
	地誌学	2・3後	2	2			○			1						
	日本史	2・3後	2	2			○			1						
	外国史	2・3前	2	2			○			1						
	政治学	2・3前	2	2			○			1				兼1		
	経済学原論	2・3後	2	2			○			1						
	現代社会学分野	現代社会学概論	2前	2	2			○			1	1				
地域社会学		2・3前	2	2			○			1	1					
家族社会学		2・3後	2	2			○			1						
産業社会学		2・3前	2	2			○			1						
環境社会学		2・3前	2	2			○			1						
教育社会学		2・3後	2	2			○			1						
国際社会学		2・3後	2	2			○			2						
社会保障論		2・3前	2	2			○			1				兼1		
社会問題論		2・3後	2	2			○			1						
日本思想史		2・3前	2	2			○			1						
社会文化論	2・3後	2	2			○			1	1						
専門科目	大衆文化論	2・3後	2	2			○							兼1		
	サブカルチャー論	2・3後	2	2			○							兼1		
	ジェンダー論	2・3後	2	2			○							兼1		
	観光学概論	2・3後	2	2			○							兼1		

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考				
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手					
専門教育科目	メディア社会学分野	メディア社会学概論	2前	2			○			2								
		メディア環境論	2・3後	2			○			1								
		メディア文化論	2・3前	2			○			1								
		メディアの法と倫理	2・3後	2			○			1								
		マス・コミュニケーション論	2・3前	2			○			1								
		ジャーナリズム論	2・3前	2			○			1								
		活字メディア論	2・3後	2			○			1								
		新聞論	2・3後	2			○			1								
		広告論	2・3後	2			○			1								
		インターネットコミュニケーション論	2・3後	2			○			1								
		マルチメディア論	2・3後	2			○			1								
		ネット報道論	2・3前	2			○			1								
		放送メディア論	2・3後	2			○			1								
	映像コミュニケーション論	2・3前	2			○			1								兼1	
	メディア制作演習	2・3後	2				○			1							兼1	
	社会心理学分野	社会心理学概論	2前	2			○			1	1							
		社会と個人	2・3後	2			○				1							
		動機づけの心理	2・3前	2			○			2								
		認知心理学	2・3前	2			○			2								
		知覚心理学	2・3前	2			○			1								
		生理心理学	2・3前	2			○				1							
		対人関係論	2・3後	2			○			1	1							
		コミュニケーション論	2・3前	2			○			1								兼1
		犯罪心理学	2・3後	2			○											
		社会と集団	2・3後	2			○			1	1							
		意思決定の心理学	2・3後	2			○			1								
		行動科学	2・3後	2			○			1								
		経済心理学	2・3後	2			○			1								
	人間と文化	2・3前	2			○			1									
	人間と音楽	2・3後	2			○				1								
	宗教と社会	2・3前	2			○			1									
	関連科目	グローバルゼーション論	1・2・3後	2			○			2								
		日本の地域文化	2・3前	2			○			1								
社会と子ども		2・3前	2			○				1								
人間と暮らし		2・3後	2			○			1	1								
地域研究		2・3前	2			○			1									
資源論		1・2・3前	2			○			1									
都市と空間		1・2・3後	2			○			1	1								
まちと美術館		1・2・3後	2			○				1								
生涯学習概論		1・2・3前	2			○												
文化人類学		1・2・3後	2			○												
報道の現場		1・2・3後	2			○			1									
国際報道論		1・2・3後	2			○			1									
スポーツ報道論		1・2・3後	2			○			1									
オリンピック論		1・2・3後	2			○			1									
伝える文化		1・2・3前	2			○			1									
広告史		1・2・3前	2			○			1									
PR論		1・2・3前	2			○			1									
コミュニティ心理	2・3前	2							1									
心理測定法	2・3前	2				○		1										
心理学実験 I	2・3前	2					○	1	1							兼1		
心理学実験 II	2・3後	2					○	1	1							兼1		
基礎・専門演習科目	基礎演習	1通	2					○	5	2								
	専門演習 I	2通	2					○	5	2								
	専門演習 II	3通	2					○	6	1								
	卒業研究	4通	4					○	14	4								
自由選択科目	小計100(科目)	-	50	150	0			-	15	6	0	0	0				兼8	
	中等教科教育法(社会) I	2前			2	○											兼1	
	中等教科教育法(社会) II	2前			2	○											兼1	
	中等教科教育法(地歴)	2後			2	○											兼1	
	中等教科教育法(公民)	2後			2	○											兼1	
	教育学概論	2前			2	○			1									
	教育基礎論	2前			2	○				1								
	教師論	2前			2	○				1								
	教育心理学	2後			2	○			1									
	教育制度論	3前			2	○											兼1	
	教育課程論	2後			2	○											兼1	
	特別支援教育	4前			1	○											兼1	
	道徳理論と指導法	4前			2	○											兼1	
	特別活動及び総合的な学習の時間の指導法	3前			2	○			1									
	教育の方法技術	3後			2	○											兼2	
	生徒・進路指導論	4前			2	○			1									
	教育相談	2後			2	○			1									
	学級経営	2前			2	○				1								
	中等教育実習事後指導	4前			1		○		2	1							共同	
	中等教育実習 I	4後			2			○	2	2								
	中等教育実習 II	4後			2			○	2	1								
	就職実践演習(中・高)	4後			2			○	3	2							共同	
	学校経営と学校図書館	4前			2	○											兼1	
	学校図書館メディアの構成	4前			2	○											兼1	
	学習指導と学校図書館	4前			2	○											兼1	

科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考		
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手			
自由選択科目	読書と豊かな人間性	3後			2	○										兼1
	情報メディアの活用	3後			2	○										兼1
	図書館概論	3前			2	○										兼1
	図書館情報技術論	3前			2	○										兼1
	図書館制度・経営論	3前			2	○										兼1
	図書館サービス概論	3後			2	○										兼1
	情報サービス論	3後			2	○										兼1
	児童サービス論	3後			2	○										兼1
	情報サービス演習	3後			2		○									兼1
	図書館情報資源概論	3前			2	○										兼1
	情報資源組織論	3後			2	○										兼1
	情報資源組織演習	3後			2		○									兼1
	図書・図書館史	4前			1	○										兼1
	図書館施設論	4後			1	○										兼1
	博物館概論	3前			2	○										兼1
	博物館経営論	3前			2	○										兼1
	博物館資料論	3後			2	○										兼1
	博物館資料保存論	3後			2	○										兼1
	博物館展示論	4前			2	○										兼1
	博物館教育論	4前			2	○										兼1
	博物館情報・メディア論	4後			2	○										兼1
博物館実習	4通			3			○								兼1	
小計46(科目)		—	0	0	89	—			1	1						兼9
合計(171科目)		—	70	174	89	—			15	6	0	0	0			兼25
学位又は称号		学士(社会学)			学位又は学科の分野			社会学・社会福祉学関係								
卒業要件及び履修方法						授業期間等										
以下に掲げる基準を見たとし、合計124単位以上修得することを卒業要件とする。																
<共通基礎科目> ・必修科目20単位を修得すること。 ・合計28単位以上修得すること。						1 学年の学期区分						2期				
<専門教育科目> (基盤科目) ・必修科目32単位を修得すること。 ・合計38単位以上修得すること。 (専門科目) ・必修科目6単位を修得すること。 ・所属コースの専門分野の選択科目から20単位以上修得すること。 ・合計38単位以上修得すること。						1 学期の授業期間						15週				
(関連科目) ・必修科目2単位を修得すること。 ・選択必修科目1科目2単位を修得すること。 ・合計10単位以上修得すること。 (基礎・専門演習科目) ・6単位修得すること。 (卒業研究) ・4単位修得すること。						1 時限の授業時間						90分				
※ 履修科目の登録の上限は、年間45単位を上限とする。 ただし、免許・資格取得のために自由選択科目を履修する場合はこの限りでない。 ※ 自由選択科目の修得単位数は卒業要件に含まない。																

授 業 科 目 の 概 要			
(社会学部社会学科)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通 基礎 科目	視野 形成 科目	哲学入門	学生は哲学の基本的な問題として、「真理」、「心」、「自由」について、それぞれの分野の主要な学説を概観しながら学習していきます。また、授業内で実施されるグループワークや、ポピュラーミュージックを題材としたディスカッションを通じて、学生は自分自身の考えを説明するとともに、他の学生の話聞き、合理的な議論を行う力を養います。
		倫理学入門	学生は倫理学の基本的な問題として、「道徳」、「悪」、「愛」について、それぞれの分野の主要な学説を概観しながら学習していきます。また、授業内で実施されるグループワークや、ポピュラーミュージックを題材としたディスカッションを通じて、学生は自分自身の考えを説明するとともに、他の学生の話聞き、合理的な議論を行う力を養います。
		心理学入門	心理学の基礎概念・基礎理論を学び理解し、習得する。この授業は社会現象を心理学的視点から考える力と社会問題を解決する力を身につけることが最大の目的である。到達目標は、①心理学の基礎概念、基礎理論を身につける。②心理学に興味を持って、認定心理士資格を目指す意欲を持つ。③身近な社会問題を心理学視点で考えることができるようになる。授業は講義形式で行う。この授業は心理学に関する基礎概念・基礎理論を学習する。具体的には「見る」「聞く」「感じる」「覚える」「思う」「学ぶ」「考える」「決める」「頑張る」「気にする」「伝える」「魅かれる」「付き合う」「助ける」の心理学を概説する。
		日本人論	日本人の民族的特質について、前半においては、歴史学、民俗学、西洋人の視点等から解き明かしていく。その際、特に自然との関係に留意する。遺伝子学的に南方の島々や大陸から渡来した人びとをルーツとし、自然が豊かで外敵が少ない日本列島という環境によって育まれた日本人の特質を明らかにする。後半においては、近現代における内外の代表的な日本人論の分析を通じて知見を深めたい。また、近代以降の日本人がそれ以前と比較して、どのように変化してきたかという点にも着目する。現在や未来の日本社会や日本人のあり方を考える上で、重要な視点を提供することとしたい。講義を中心として授業を進めるが、グループワークも導入する。
		伝統と文化	「伝統」とは何か、「文化」とは何か、「伝統と文化」と「伝統文化」の相違点は何か、これらの定義から始め、日本の優れた古典作品や諸道をもとに、日本人の精神性の特質を学ぶ。「先人に学ぶ」として、古代・中世・近世において日本人が書き残したのから、日本の伝統の通底に流れるものを解き明かしていく。「諸道に学ぶ」として、芸能・民俗・言語・武道において日本人が伝えてきたことから、日本の文化における独自性と普遍性を明らかにしていく。また、演習（アクティブラーニング）として、インド・中国から伝来し、日本で発展した伝統的な文化の一つである囲碁が、コミュニケーションのツールとして、世代や国境を越えて役立つことを体感する。
		ことばと文学	授業の目標は次の1、2の通りである。1. 我が国において幼い子どもから大人まで広く親しまれている作品を取り上げ、作品の中で用いられる言葉の機能についての知識を身につける。2. 言葉を持つ様々な機能についての知識解に基づいてそれぞれの作品を味わい、作品への理解を深める。これを踏まえ本講義では、まずに就学以前に「お話」「読み聞かせ」などで扱われる作品（民話・物語）のうち「鬼」が登場する話を取り上げ、そこに用いられている言葉を取り上げ、その機能を理解する。つぎに学校の教科書で扱われる作品を取り上げて、先の活動で身につけた基礎的な能力を用いて読解する。なお、毎時間授業用プリント（書き込み式）を配布し、時間の終わりに回収する。

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
共通基礎科目	視野形成科目	法律学入門	私たちの日常生活は「法」と深い関わりを持っている。たとえば、通学のための電車の利用や食堂・コンビニでの昼食の購入など、毎日当たり前に行っている行為ですら何らかの「法」の規律を受けている。この授業では、できるだけ具体的な事例を使いながら、「法」の基本的な枠組みそして特有の考え方をできるだけわかりやすく説明する。	
		日本国憲法	本科目は教員による講義を中心とし、適宜、受講生との質疑・応答などの討論を盛り込むこととする。講義では、統治機構と基本的人権を中心に、国民主権の原理、平和主義、権力分立、選挙制度、国会、内閣、裁判所、地方自治、人権総論、法の下での平等、自由権、社会権などに関する日本国憲法の重要な論点を詳述し、受講生が憲法解釈の基礎知識を習得することができるようにする。さらに、レポートの提出や授業での討論を通じて、受講生が憲法の考え方を応用・実践できるような思考様式を習得することを目指すこととする。	
		人間関係論	私たち人間は、他者との関係をもって生きなければ、生物種としての「ヒト」になることはできたとしても、「人間」になることはできない。また「人間」になるということの個性（個性）を尊重しつつも、そこに社会、文化的な影響が色濃く刻印されていることを自覚することは重要である。以上の点について、限られた視点からではあるものの、担当教員と共に考えていく。	
		数学入門	高校まではほぼ全員が数学を学んできたが、大学では縁遠くなってしまふ人が多い。これはとても残念なことで、高校までで出会った数学も使い方次第、発展のさせ方次第で、世の中の事象と深く関わっている。この講義では、日常生活の中で出会ういくつかの事象について、数学的な考察をし、関連するモデル等を作る予定である。	
		物理学入門	物理学は、自然現象をつぶさに捉え、自然界を支配する基本的な法則を見つけ出す学問です。また、見いだした法則を現象に適用し、未来の状態を予測できる学問でもあります。そのため、それ自身で閉じた学問では無く、様々な科学や工学と絡んでいます。本講義は、物事を物理的にとらえる方法を理解することが目的です。そのため、物理式の計算に終始する形式の講義ではありません。本講義を受講し、物理的な視点を身につけることができれば、身近な現象をこれまでと違った観点からとらえることが出来るようになるでしょう。	
		化学入門	高校時代に化学を履修していない学生や化学が苦手な学生も化学に興味を持って、楽しみながら化学の基礎について学んで欲しい。図表や絵などを多く取り入れ、理解できていることを確認しながら、理解困難なところは繰り返し説明していくので、この講義を通して、原子の構造、化学結合、酸化と還元などの基礎的な知識を確実に身につける。	
		コンピュータ入門	コンピュータの初心者のために、コンピュータやネットワークの基礎知識、情報倫理、電子メールの送受信、インターネットによる情報検索、表計算、ワープロ、多言語文字入力、プレゼンテーションソフトの操作方法などを、実際にコンピュータを操作しながら学習する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通基礎科目	視野形成科目	統計学入門	この授業は統計学の基本概念・基本知識・基本の統計法を学習する。到達目標は、①統計学の基礎を身につける。②データの整理・まとめができる。③統計的な手法を使い、データを分析し、得られた結果を解釈できる。の3点である。授業は基本的に教科書を使い、講義形式で演習・練習問題を解いて統計学について理解を深める。授業は統計学の基本概念・基礎知識・基本の統計法を学ぶ。社会学分野・心理学分野において、集団・個人意思決定を行うとき、データに基づいて正確かつ客観的に決定することが求められるが、それには統計学が重要である。	
	外国語科目	英語Ⅰ	大学入学までの数年間に英語を学ぶ上で、様々な英語と日本語の違いについて、驚きや挫折の経験を何度もしてきたと思う。しかし、英語と日本語のそうした差異を具体的に教えられたことはほぼ皆無に等しい。英語の例文を日本語に翻訳したり、日本語を英語に訳したりする作業を通して、英語と日本語の発想法の違いとそれを表現する語彙・文法・構文上の違いを明らかにしていく。	
		英語Ⅱ	英語Ⅰに引き続き、高等学校までに学習している英文法の知識を、読む、書く、聞く、話すの4技能で生かすことができるよう、タスクベースの演習形式での授業を行う。身近な話題だけでなくや専門的(教育、英語教育)な話題についても扱う。英語Ⅱでは、自らの考えを発信するだけでなく、読んだり聞いたりした他の人の考えについて、重点を整理しまとめ話したり書いたりすることができるスキルについても学ぶ。	
		英語Ⅲ	英語の4技能(聞く、話す、読む、書く)を育成するとともに英語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身につけることを目標とする。とりわけ聞くこと・読むことについては、政治行政に係るものも含む多種多様な教材を扱って、英語を通して正確かつ迅速に情報を把握し理解する能力を養っていく。必須トレーニングとして毎回音読練習や暗唱発表を行い、記憶した英文をもとに話すこと・書くことの活動さらにはコミュニケーション活動へと発展させて、総合的英語力の充実と活性化を目指す。	
		英語Ⅳ	これまでに修得した英語の4技能の強化を図る。英文読解能力はより高度で多様なジャンルの英文読解トレーニングを行い、内容理解や内容分析の力を養うことで、英語の全般的な読解力を向上させる。また様々な場面のライティングスキルを学ぶと共に、スピーキングやリスニングにも必要な正しい発音法、また身近な英語表現などを学習し、パブリックスピーキングやプレゼンテーションの能力向上を図る。授業ではテキストだけでなく独自の教材や様々な演習を取り入れ、英語を通して英語圏の文化や社会を学ぶ。	
		英語演習Ⅰ	原書テキストを読むことにより、アカデミックな英文の読解に慣れ親しむと共に現在の英語学の概要の把握に努める。最終的にはその知識を社会生活の様々な場面で活用することを目指す。原書テキストを講読し、それをレポートにまとめる形で、現代英文法の礎となっている言語学の基本を理解する。具体的には、言語知識や任意性、文法規則など、毎回異なるテーマを取り上げ、それについて知識を広げ理解を深める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
共通基礎科目	外国語科目	英語演習Ⅱ	英語学のテキストを原書で読み、内容を理解し、社会で活動する際の背景知識として活用できることを目指す。英語学のテキストを原書で読み、内容を理解し、社会で活動する際の背景知識として活用できることを目指す。原書を講読し、レポートをまとめることにより、人間の言語習得の仕組みを理解する。具体的には、幼少期の2か国語使用を取り上げ、母語以外の言語の習得についてその仕組みを理解する。さらに語彙の形成や、言語獲得の過程について理解する。これらの理解に基づき、それを社会活動の中で活用できるようになることを目指す。	
	保健体育科目	スポーツ	現代社会におけるスポーツの力（する・みる・支える）や意義を理論と実技を通して強く逞しいクリエイティブな生き方を習得する。体力づくりや基本的なトレーニングの基礎を自らの身体を持って体得する。各種スポーツの基本的技能や知識（ルール、戦術、審判法、コーチング法）を習得し、個人やチームで試合ができるようにする。スポーツの楽しさとフェアプレーを体験するとともに、スポーツによる人づくり・仲間づくりを体得し、生涯に亘るスポーツの生活化とスポーツフォエバーライフのスキルを習得する。	
	キャリアデザイン科目	キャリアデザインⅠ	大学の入学年次であるこの時期において、まず、「大学での学び」や「社会学の学び」を知るとともに、「いろいろな職業とその社会的役割」を知ることにより、キャリア基礎力の養成を図る。企業の有識者を講師とした「実学講座」を授業に組み込み、企業現場の「今」に触れることで、進路設計のための知識を増やし、関心を高めることをねらう。	
		キャリアデザインⅡ	キャリアデザインⅠにおける学びを承け、「大学における学び」と職業とを結びつけて考えることで、社会に貢献する人材としての自己の将来像を描けるようにする。また、社会人としての姿勢を知り、社会人に必要な知識・技能を身につけることで、キャリア基礎力を高めることを目指す。さらに、1年次から継続して企業の有識者を講師とした「実学講座」を授業に組み込み、企業現場の社会的「実際」に触れることで、職業的自立に向けて視野を広げられるようにする。	
		キャリアデザインⅢ	キャリアデザインⅡにおける学びを承け、進路決定に必要な知識及び技能を身につけることを目指すとともに、その知識・技能と、これまでに身につけたキャリア基礎力とを活用して、進路選択ができるようにする。社会人としての姿勢を知り、社会人に必要な知識・技能を身につけることで、キャリア基礎力を高めることを目指す。	
		キャリアデザインⅣ	キャリアデザインⅢにおける学びを承け、身につけた専門的知識や技能を生かす人材として活躍できる進路の決定を目指す。4年間の学びを修める最終学年として卒業後、それぞれが選択した進路において社会的・職業的自立ができるように、社会人基礎力を養成することを目指す。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門教育科目	基盤科目	社会学入門Ⅰ	社会学とはなにかをその基本的視点と論理から学ぶ。私たちは社会に生きているが、その情報化、グローバル化の嵐のなかで、その在り様は急激に変化している。私たちはその激流のなかで社会の構造と変化を見失ってはいけない。社会学の知を手がかりに、社会の在り様やメカニズムをしっかりと学び、社会に生きるということの意味を見定める必要がある。 (オムニバス方式/全15回) (7 岩本一善/7回) 第1回社会学の考え方から第7回のコミュニケーションと社会までを担当する。 (③ 蘭信三/8回) 第8回の都市と都市的生活様式から第15回社会学の想像力までを担当する。	オムニバス
		社会学入門Ⅱ	高度情報化グローバル化が広がる中で、根拠に基づかないフェイクニュースが蔓延している。日々あふれる有象無象の情報にふれる中で、本質と真実を見抜く力と質問追求力、そして、重要な情報を他者に的確に伝えるコミュニケーション力を講義する。SNS社会の現実、国際司法の現場、情報戦争の実態にふれ、自らの研究の礎にしてもらう。授業では日本の報道ぶりと海外の報道ぶりを検証。和歌山県太地町を舞台にした米国制作、日本制作の映画も見てもらい、被写体の移し方の比較も行う。 (オムニバス方式/全15回) (③ 蘭信三/7回) 第1回の個人と社会ー私たちは一人で生きられるかから第7回の近代社会と教育ー教育と平等までを担当する。 (11 佐々木正明/8回) 第8回の平等と格差社会化ーグローバル化と格差社会の関連は？から第15回社会学から学べるものは何かまでを担当する。	オムニバス
		現代と社会	現代をグローバル化が進化する社会として捉える視点を中心としながら、その最近の知見についても考察することをテーマとし、学生が現代における社会の基本的構造変容の動き(社会や自我の脱中心化、境界の脱分化、視覚論的転回、文明の衝突、情報化、持続可能な社会、イノベーションなど)について理解を得ることを到達目標とする。	
		社会とメディア	授業では、メディアが伝える事実、または偽情報に激動する事例を伝え、メディアが社会にもたらす影響がいかに大きいかを考察する。履修者には身の回りで起こるフェイクニュースの蔓延、ファクトフルネスの実態も抽出してもらい、その原因が何なのかも探る。後半では災害が起きたときのメディアが発する情報の大切さ、将来、企業や組織に就職した際にどうメディアと接したらよいかのヒントも提示する。	
		社会と心理	恣意的、ランダムに行われているかのように見える、そしてついそのように自覚してしまう人間の行動や心の動きの背景に、実はある法則性があるのではないかと考え、それを解き明かしてみようと試みる学問が社会心理学である。この「社会と心理」というクラスでは、その広大な知見の一部を垣間見ていくことにする。	
		社会と歴史	私たちが現在当たり前と考えている社会の在り方は何時から当たり前となったのか。それはどのような歴史的背景を持っているのか。たとえば、現在では当たり前となっているソーシャルメディア(SNS)はわずか20年ほど前に普及したが、それは社会の在り方を大きく変えた。その変化を歴史的に見る視点は現代社会を理解するうえで欠かせないものである。そこで本講義では、国民国家という近代的制度の歴史、都市の歴史、家族という制度の歴史、メディア文化等、私たちが生きる現代社会を理解するうえで重要なシステム・制度・文化を歴史的な視点から理解することで、現代社会学の基本的な視点の理解を目指す。国民国家や都市や家族など現代社会の重要な要素を取りあげて、その歴史的な背景について社会学的な視点から解説を行う。また、少人数のグループでディスカッションを行い、主体的に学び、考える機会も設ける。各授業の最後に、コメントシートを配布し、意見や感想、課題についての考えを書いてもらう。それらを次回の講義の冒頭で紹介、質問に応えながら、講義を進める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	基盤科目	社会学、なかでも教育社会学・宗教社会学・文化社会学、地域社会学、国際社会学、社会調査、人権とジェンダー論等に興味・関心をもつきっかけとなるような題材を提供するとともに、それらを学ぶうえでの基礎となる知識と方法論を身につけることを目標とする。人の集まりである「社会」と、人の営みである「文化」の社会学的定義に始まり、現代社会における地域の文化的な拠点である学校と神社の役割について学ぶ。また、フィールドワーク・ライフヒストリー・反実仮想・合意形成等の社会学研究への応用法を知る。さらに、関西地域と瀬戸内海島嶼部の社会と文化の特質について考察し、国際社会のマイノリティであるロマ・ネィティブアメリカン・華僑を取り上げ、その歴史的な経緯と現状を踏まえることで、社会と文化に関する広い視野の形成をはかる。	
		我々の社会を取り巻く環境が激変している。この授業では、環境問題の現状や、社会との関わりについて解説する。環境問題の基礎知識は、今後の進路や専攻分野の如何を問わず必須と言える。この授業は個別具体的な環境問題を学ぶ前提となる知識を身に付け、背景を理解するための入門編である。同時に、よりよい社会をつくるために、我々は何をすべきか一緒に考えていく。授業では、国内外の環境問題の歴史から、環境問題から見た感染症にも触れたあと、環境問題がなぜ、どのように発生するかメカニズムを見る。続いて、我々に身近な家庭や暮らしの環境や、環境に関する仕事には何があるか概観し、最後に環境問題の解決に向けて、どうすべきかを考える。パワーポイントを使った講義が中心になるが、それぞれの回で、直近で話題になっている環境問題のニュースを取り上げて、受講者の知識習得に役立てる。	
		21世紀の社会において、われわれに突き付けられている具体的な重要課題をピックアップして、テーマごとに4回に分けて、深く考察する。テーマは「縮む日本 人口減少社会」「100万人のひきこもり問題」「インターネット革命がもたらす未来」「女性、外国人、障害者が活躍する共生社会」を取り上げる。講義では報道記事やニュース番組を活用し、ネット上の現象にも目を配る。その問題の当事者のゲストスピーカーも招聘する予定で、問題考察のさらなる深化を狙う。	
		本授業では記述統計及び推測統計の基礎について講義と演習を行ない、データ分析の「道具」としての統計的手法について実践的な手法を身につけることを目的とする。手法の前提となる条件を理解した上で、使えるようになることを目指す。授業は可能な範囲で受講者のニーズに応じて行う。学習効果を確認し、習熟を深めるために、授業中に演習を行う。	
		この科目では、社会調査の基礎的な手法、注意点を学び、実際、グループごとにわけて社会調査を実践してもらう。調査結果を集計処理、授業中にこの調査の意義をふくめた集計結果を発表してもらい、ほかの学生らの意見を聞いて、フォローアップをする。授業の後半では、実践した社会調査がどんな分野に貢献できるのかを考察し、社会課題に対する次なる行動につなげてもらう。	
		各種データをまとめ、整理するためのさまざまな統計的手法の特徴と有用性について紹介する。また、実際に各種分析手法を用いて、データに潜む因果関係を統計的に明らかにすることを学ぶとともに、実際に分各種データの分析を試みる。各授業の最後に、コメントシートを配布し、意見や感想、課題についての考えを書いてもらう。それらを次回の講義の冒頭で紹介、質問に応えながら、講義を進める。また、随時小テストを行うこともある。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門 教育 科目	基 盤 科 目	量的調査法	本授業では、まずはじめに妥当性と信頼性のある質問紙を作成するための基礎的な理論と方法について講義を行なう。そのうえで、学習効果を確認しながら習熟を深めるために、4～5名のグループを構成し、各グループごとにテーマを決め、質問紙による量的調査の一連の手続き（質問紙の作成、実施、分析）についての演習を行う。これにより、量的調査の柱のひとつとなる質問紙調査を行うために必要となる基本的手法を身につけることを目的とする。授業は可能な範囲で受講者のニーズに応じて行う。なお、本授業を履修するまでに「データ分析」の授業科目を修得しておくこと。	
		質的調査法	本講義では、質的調査の持つ方法論的特性を理解し、質的調査法で主に用いられる手法について解説する。また、後半では、グループワークとして、身近なテーマについて質的調査法を用いて実際にインタビュー調査を行いレポートを作成する。これらを通じて、社会調査を行う際に必要な基本的な方法論と、調査計画を立て、物事を質的に分析するのに必要なスキルを身につける。各授業の最後に、コメントシートを配布し、意見や感想、課題についての考えを書いてもらう。それらを次回の講義の冒頭で紹介し、質問に応えながら、講義を進める。	
		社会調査実習	初回の授業で、受講者の関心を把握しながら、共通のテーマを設定するが、仮題として「レジ袋有料化の意識と行動」を提示する。そこで、実際にどのように仮説を構成し、調査方法を選択し、調査を実施するかを考える。さらに事実や情報、データを収集し、知見を整理した上で、自ら報告書の作成に挑む。受講者の人数により、班編成し、グループワークにすることもある。 1年次に「社会調査入門」「社会調査方法論」を学んでいることが望ましい。	
		人文地理学概論	地理学、人文地理学の概要を紹介したのち、村落を研究の対象とする地理学（村落地理学・歴史地理学）について説明する。そして、高校地理教育が扱う基本的内容を軸に、村落の立地や形態、機能について検討する。その際、地形図の読図演習を行うことがある。その上で、日本各地の多様な村落について、翻刻された史料を一部利用しつつ解説する。講義では、映像や、担当者撮影の写真、地図類を多数提示する。	
		自然地理学概論	自然地理学の概要と地球の自然環境（地形・気候・植生など）についてまず確認する。次に、陸地の形成プロセスや、安定大陸と変動帯、気候などについて解説する。その上で、自然環境を徹視的に検討し、人間の主要な生活舞台である平野の地形環境について詳述する。さらに特殊な気候環境下で形成された氷食地形・カルスト地形・乾燥地形、さらには人工地形と地形・気象災害を扱う。数多くの世界の各地の写真（多くは担当者撮影）と地図類を提示しつつ、講義を進める。	
		地誌学概論	地理学の概要と地理学と地誌学の関係について紹介したあと、世界の自然環境と文化について論じる。その後、テキストを利用しつつ、自然-人間関係を踏まえつつ、各大陸・地方ごとの生活・産業・社会について検討し、その実態を把握していく。多数の写真（担当者の撮影したもの中心）や地図、図表類を利用しつつ講義を進める。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門教育科目	基盤科目	日本史概論	15回の講義で全時代を概説するには余裕がないが、できるかぎりコンパクトにまとめ、日本の歴史の魅力を伝えたい。古代史（3回）・中世史（3回）・近世史（3回）・近現代史（6回）の順に、講義を中心とした授業となるが、特に、混乱期である鎌倉末期から南北朝期、江戸末期から明治初期、昭和戦前期については詳しく説明する。さらに、ローカルな視点から日本文化の特質を、グローバルな視点から国際社会における日本の立場を明らかにする。また、毎回「問い」を一つ出題するので、それに対する「仮説」も立ててもらいたい。なお、高等学校で日本史を履修しなかった受講者にも配慮はするが、できれば、高等学校日本史教科書を通読しておいて欲しい。	
		外国史概論	本授業では、社会学を学ぶ上でのキー概念となる「近代」と「近代化」を中心に、西洋近現代の歴史を学ぶ。授業の前半では、18世紀末から19世紀にかけて「国民国家」といわれる近代国家の誕生と「国民」の形成、産業革命がもたらした社会の急速な変化、それが政治経済に与えた影響について考察する。後半では、20世紀における国家間の対立と協調を中心に、国際機関や地域統合など、国家を超える枠組みが出来上がって行く過程について理解する。	
		政治学概論	イントロダクションの後、ヨーロッパの政治史を振り返りながら、高校時代の社会科の基本事項を確認、政治学の基本的概念を掘り下げる。第4回以降は、議院内閣制における議会と内閣の関係、大統領制、選挙制度と政党政治など、欧米諸国の事例も踏まえ説明。第9回以降は欧米諸国との比較も踏まえ戦後日本政治の特色と1990年代以降、現在の変化を説明。第13回以降は経済政策、福祉国家、（日本に関しては）憲法改正や安全保障をめぐる政治的争点や対立軸を説明。最後に現在の外交や国際政治にも言及したい。以下の授業計画には記していないが、随時、新聞やテレビで報道されている時事的問題も授業で取り上げたい。毎回の授業の最後、コメント用紙に授業内容の疑問や質問を記して提出。次の授業でコメント用紙の受講生の質問やコメントにリプライしたい。	
		経済学概論	経済学は現実の社会を理解する手段であり、単に理論を知っているだけでは意味がない。こうした問題意識から、本講義では理論の解説にとどまらず、実際の経済ニュースを取り上げ、理論に基づいて解釈・議論する実習やグループディスカッションを取り入れる。理解度を測り知識を確実に定着させるため、授業中に小テストやリアクションペーパーを課すことがある。	
		人文地理学	地理学、人文地理学の概要を紹介したのち、都市と村落を研究の対象とする集落地理学について説明する。そして、高校地理教育が扱う基本的内容を軸に、都市と村落の形態や機能について検討する。その際、地形図を読むために、テキストを用いて地形図読図の演習を行う。その上で、地形図を読むために色鉛筆での着色作業を行いつつ（12色ほどの色鉛筆を用意すること。ペン不可）、日本各地の多様な都市と村落について解説する。講義では、担当者撮影の写真を多数提示する。	
		自然地理学	自然地理学の概要と気候の成因・分布についてまず確認する。そして、世界の気候区、すなわち熱帯・乾燥帯・温帯・亜寒帯・寒帯ごとに、気候の特色、植生・土壌、人間活動との関わりなどについて解説する。さらに、気候変動と人間活動の影響、地球環境問題（温暖化・酸性雨・砂漠化など）についても扱う。数多くの世界の各地の写真（多くは担当者撮影）と図表類を提示しつつ、講義を進める。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	基盤科目	地誌学	地理学の概要と地理学と地誌学の関係について紹介したあと、世界の自然環境と文化について論じる。その後、テキストを利用しつつ、自然-人間関係を踏まえつつ、各大陸・地方ごとの生活・産業・社会について検討し、その実態を把握していく。多数の写真（担当者の撮影したもの中心）や地図、図表類を利用しつつ講義を進める。	
		日本史	12世紀末から17世紀初頭の約400年間の政争史を取り上げ、平氏政権、鎌倉幕府、建武政権、室町幕府、織豊政権、江戸幕府と移り変わっていく、歴史のダイナミックな展開を学ぶ。特に武家政権の発展を、天皇や寺社との関係に着目しつつ考察する。講義形式のみならず、アクティブラーニングも用いて、問いに対する仮説を考え、その検証を実施する。	
		外国史	授業では、さまざまな切り口で描かれた第一次世界大戦の歴史を比較しながら、どれほど多様な歴史叙述が可能であるかを理解しつつ、歴史に対する理解を深めていく。第2～4回の授業は、担当教員が全体像の理解を助けるための講義を行い、第5回以降の授業では、受講者がシリーズ（12冊）の内の1冊を担当し、レジュメまたはプレゼンテーションソフトを用いて、内容を紹介する。その後、担当教員が内容についての解説を補足した上で、受講者全員で討論を行う。	
		政治学	イントロダクションの後、ヨーロッパの政治史を振り返りながら、高校時代の社会科の基本事項を確認、政治学の基本的概念を掘り下げる。第4回以降は、議院内閣制における議会と内閣の関係、大統領制、選挙制度と政党政治など、欧米諸国の事例も踏まえ説明。第9回以降は欧米諸国との比較も踏まえ戦後日本政治の特色と1990年代以降、現在の変化を説明。第12回以降は地方自治、経済政策、福祉国家、（日本に関しては）憲法改正や安全保障をめぐる政治的争点や対立軸を説明。最後に現在の外交や国際政治にも言及したい。 以下の授業計画には記していないが、随時、新聞やテレビで報道されている時事的問題も授業で取り上げたい。毎回の授業の最後、コメント用紙に授業内容の疑問や質問を記して提出。次の授業でコメント用紙の受講生の質問やコメントにリプライしたい。	
		経済学原論	経済学は大きく分けると、家計や企業など個々の経済主体の行動を扱うマイクロ経済学と、景気や経済政策など国レベルの動きを扱うマクロ経済学に分かれる。本講義では両者の基礎を押さえた上で、現実の経済問題や景気の先行きについて論理的に考える能力を身につけることを目標とする。本講義では理論の解説にとどまらず、実際の経済問題を取り上げ、理論に基づいて解釈・議論する実習やグループディスカッションを取り入れる。理解度を測り知識を確実に定着させるため、授業中に小テストやリアクションペーパーを課すことがある。	
専門科目	現代社会学分野	現代社会学概論	本講義では、これまで社会学の領域で議論されてきた方法論や概念、その提唱者について紹介しながら、適宜学生にも質問を投げかけ、それらの考え方をもとに現代社会の様々な事象について議論する。 各授業の最後に、コメントシートを配布し、意見や感想を書いてもらおう。それらを次の講義の冒頭で紹介、質問に応えながら、講義を進める。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	現代社会学分野	地域社会学	本講義では、地域社会に関する主要な概念である地域社会、コミュニティ…など地域社会に関わる基本的な用語や概念について解説する。その後、地域社会の様々な変化～都市化、過疎化、グローバル化、自治のあり方の変化など、の地域課題について、事例紹介も交えながら解説する。 各授業の最後に、コメントシートを配布し、意見や感想を書いてもらう。それらを次回の講義の冒頭で紹介、質問に応えながら、講義を進める。	
		家族社会学	授業では初めに家族を理解するために必要な家族に関する基本的な用語を紹介する。次に、近代家族の特徴を理解した上で、日本の家族が戦前から戦後の高度経済成長期を経て現在へと至るまでにどのように変化してきたのか、人口、階層、ジェンダー、雇用、福祉など多様な視点からみていく。最後に、今後の家族はどのように変わっていくのかを検討したい。「家族」が多様化している現状認識を出発点として、日本の「家族」のありようの変化と現状について、社会階層やジェンダーの観点から、時代、国・地域ごとの比較などの様々な実証データをもとに概説し、ディスカッションして、理解を深める。	
		産業社会学	前近代の日本社会を農業社会とみる傾向に対して、非農業の経済活動の意義・重要性を指摘する。その際、地理学・民俗学・社会史などの研究動向について紹介する。その上で、鉱業、砂鉄製錬業（たたら製鉄）、狩猟・採集（マタギ）、木器生産（木地屋）、絹織物工業、漁業（地引網）などに経済的基盤を置いた村落と社会について検討していく。講義では、多くの写真、映像、図表、翻刻した史料を提示する。	
		環境社会学	授業では、環境問題の歴史的な経過や、自然環境・社会環境の基本的事項と課題を探る。環境問題について多角的に捉え、問題の解決に向けて当事者がどのような取り組みや努力をしているかを知る。 テキストを参照しつつ、パワーポイントを使った講義が中心になるが、それぞれの回には、基本事項を確認する小テスト（クイズ）を行う。このテストは、「環境社会検定」（ECO検定）に密接に関連するもので、授業全体を理解して、ECO検定に挑戦してほしい。	
		教育社会学	「教育社会学」は、教育の営みを社会的な視点から捉えようとするものである。それは、教育はどうある「べき」かということを直接問うのではなく、教育は現実はどう「ある」のかを具体的なデータをもとに意味づけていくという特徴を持っている。本講義では、具体的な教育現象をとりあげながら、社会的なものを見方を身につけることを目的とする。教育という営みが文化的・社会的にどういう意味を持つのかを理解することは、教育実践を行う教師にとっては自らの実践を振り返るために、また社会を構成する一市民として不可欠である。本講義を通して理想論や印象論とは異なる教育の捉え方を学んでほしい。	
		国際社会学	グローバル化の進展と、それに伴う人口移動や国境を超えた人びとの結びつきは21世紀に入り、ますます強まっている。前半の授業では、主に19世紀以降の国際人口移動の歴史を把握しつつ、国際社会学におけるキー概念について理解する。その後、1) 国民国家の側がこの状況にどのように対応し、また国家の枠組みがどのように変化しているか、2) 国境を超える新たな主体が国際社会においてどのように活動しているか、という点に注目しつつ、現代の動向について学んでいく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	現代社会学分野 専門科目	社会保障論	社会権等の基本的な人権を保障するためには、様々なリスクから個人を守る公的な制度が必要である。様々なリスクとは、疾病、労働災害、失業、高齢化、貧困等を挙げることができ、これらのリスクに対応して健康保険、労働災害補償保険、失業保険、年金、公的扶助の制度がある。その財源を社会保険方式にするのか、あるいは税負担にするのか。対象を貧困者に限定するのか、それとも広く普遍主義的に対象者を設定するのかといった問題は大きな争点になる。また近年、社会保障へのニーズは高まる一方、財政的制約が大きな問題となっている他、公共サービス供給への市場主義の導入や社会保障給付と就労支援との連動（ワークフェア）が各国の政策の傾向として著しくなっている。本授業は社会保障の歴史から始め、年金や健康保険等の社会保障制度を扱うが、社会保障制度全般を網羅的に説明するのではなく、上記の問題点や近年の傾向を説明することに重点を置きたい。日本の制度のみならず、必要に応じて、海外の制度や事情にも言及したい。	
		社会問題論	現代の社会問題について、社会学的見地、とくに社会構築主義の視点やリスク社会論を説明しながら、具体的な諸問題として、持続可能な社会（環境問題など）や青少年問題、少子高齢化問題などについて考えていき、学生ちがこうした具体的事例をとおして、社会問題についての理解を深めるように授業を構成する。	
		日本思想史	日本人の思想を諸史料をもとに、現代の日本人のものの考え方と対比させながら、歴史的に解明していく。次々と外来思想を受け入れることによって、日本人の思想が変容していく過程を考察し、その中で、変わらぬものをクローズアップすることで、日本人の思想的な特質について知見を深める。	
		社会文化論	本授業では、音楽、ファッション、メディアなどの「文化」について、社会学の視点から理解を深めることを目的とする。具体的には、ポピュラー音楽、「カワイイ」とファッション、ソーシャルメディアとオタクなどに関連する事例をもとに理解を深め、定性的あるいは定量的に「文化」を観察する力を涵養する。また、文化が日常生活に及ぼす影響や文化の変容の過程を社会学的な視点から理解するとともに、多様な意味を内包する「文化」について考察できるようにすることを目指す。	
		大衆文化論	大衆文化（マス・カルチャー）と大衆社会（マス・ソサイエティ）との関連から始め、社会学における大衆社会論とも関連づけながら、学生たちはマスカルチャーからサブカルチャーへ、そしてポップカルチャーへの展開を中心に学ぶ。大衆文化の具体的な事例として、歌謡曲や演歌、映画、次いでマンガやアニメについても取り上げ、それらを窓口として、大衆文化の意義について理論的・実態的に学ぶ。これらの事例はその後の講義内容においても折に触れ取りあげる。社会学における大衆社会論の古典であるガセットやリースマンの検討からはじめ、次いで現代社会におけるその変化の趨勢について考え、大衆文化がサブカルチャーからポップカルチャーへと転回していく過程を跡づける。今日では、大衆文化は文化産業論という新たな学問分野とのつながりにおいても注目されている。日本における大衆文化や大衆社会の特徴について考え、グローバルな文脈の中でのその位置づけについても検討し学ぶ。	
		サブカルチャー論	本講義では日本でのサブカルチャーの成立と展開を解説したのち、受講生が自分の好きなコンテンツについて、なぜ好きか、どのようなどが好きかPowerPoint1枚程度の資料にまとめて提出してもらおう。これを受講生自身がプレゼンまたは講師が代読し（匿名性を保つため）、他の受講生の興味を惹いた発表に高い点数を出す。また、学期末には他の受講生からのフィードバックを受けてレポートを提出してもらい（あるいは自由記述の試験）、これも評価の対象とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	現代社会学分野	ジェンダー論	ジェンダーに関する社会的課題は多岐にわたる。まずはそれらを網羅的に理解することを目標とする。そして、網羅的に理解した中から関心のあるテーマを選択して、自分の考えや意見を表現することでさらに理解を深める。本講義ではまず、統計/歴史/法律の側面から全体を俯瞰し、ジェンダーの問題をめぐる世界的な潮流と日本の立ち位置を理解する。次に、ジェンダーに関する社会課題の中から主要トピックを取り上げて紹介し、その論点を理解する。最後に、受講生が選択したテーマについて調査・発表することで理解を深め、ジェンダー視点を養う。なお、毎回ミニレポートを配布し授業終了後に回収する。	
		観光学概論	観光を学ぶべき対象としてとらえた時に、日本を支える成長産業であるという視点とともに、これまでの観光に加えて、新たなひろがりを見せる観光の形態や、SDGsにみられる責任としての持続可能性が求められるようになってくるなど、そのフィールドは広がりつつある。ここでは、さまざまな観光の現況を踏まえ、観光の諸分野とおおよその構造を理解することを目標とする。観光学について入門用テキストを使用し、観光の諸分野とその構造をほぼ網羅的に講義形式で論述する。なお、適宜(2~3回)既習事項に関連するさまざまな調査・文献研究を授業外で行うことを要求する。これらはその成果をレポートとして提出することとする。	
	メディア社会学分野	メディア社会学概論	複雑化、高度分業化が進んだ現代社会においては、他者が提供するモノやサービスを金銭で買うということに、衣食住にわたるほとんどすべての生活を依存している。また幸いにもこれまでは、プロ(専門家)が提供するそのようなモノやサービスの質にいちいち根本的な疑いの念を差し挟むなどということは、煩わしい非合理的なことであると言っても、それほど的外れなことではなかった。では「知る」ということについてはどうであるのか? 私たちは、私たちが直接自分の感覚器官を通じて経験することができない事柄については、メディアに「知る」ということを委譲してもよいのだろうか? 本講義においては、現代社会における、私たちの「知る」という経験について考えていく。	
		メディア環境論	私たちは産まれた場所や時代を自ら選んで生まれてきたわけではない。現在を生きる私たちにとってこの社会とは、そこで生き続けていくことを運命づけられた条件なのである。では日常的な生活の場として現代社会を生きている私たちの意識や文化、感受性などは、そこからどのような影響を受けているのか、あるいはいないのか。仮に受けているとしたら、私たちが他者とコミュニケーションを取り交わす様態(モード)に特に特徴的な点が見出せるのか、あるいは否か。本講義では、そのような視点から現代社会とメディアとの関係について、受講生と共に考えていく。	
		メディア文化論	メディア文化がメディアの持つどのような特質から生じるのかを理解するために、まず各メディアの発達による社会への影響の進行を理解する。 メディアの持つビジネス的側面が、文化の成立および拡大・変貌の原因となっていることを確かめるために、それぞれの事例を紹介し解説する。 統合マーケティング・コミュニケーションの手法に基づく現代のメディア戦略を、身近な事例を考察することで確認する(予習・復習として具体例を収集・分析する)。 メディア文化の発達に伴い生じる社会的課題を提示し、対処できる知識を身につける。	
		メディアの法と倫理	本授業では、「映像」を「放送での番組・TVCM」と「通信(web)での自主制作動画」の観点から捉え、情報学・社会学等の諸学からの考察や作品鑑賞等の学術的なアプローチを踏まえて、それらが発信するメッセージ、それらの基盤にある文化・産業の面を含んだコミュニケーション全般の講義を行う。また、受講生は1チーム3人でグループディスカッションを行い、その内容をチームで発表する。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	メディア社会学分野	マス・コミュニケーション論	授業では、マス・コミュニケーションの現状がどうなっているかに重点を置く。新聞やテレビ局などそれぞれの業界の現場を紹介しながら、マス・コミュニケーション業界全体に突き付けられた課題、変革のためのポイントを考察する。履修者には、自分がどのような時に、どのような形態で、ニュースや情報を得ているかを認識してもらい、将来、そのスタイルがどう変わっていくかを推察してもらう。	
		ジャーナリズム論	授業では、近年、話題になったジャーナリズムへの課題を具体的にあげながら、その課題に報道機関がどう対処してきたのか、その結果、どんな現象が生まれているかを考察する。特に、インターネットメディアが急成長する中で、新聞・ラジオ・テレビなどの「オールドメディア」がどう対処しているのかも検証する。理論学習よりも実践の上での具体的な問題対処に議論の重点を置き、報道の在り方を考える。	
		活字メディア論	15世紀にグーテンベルクが発明した活版印刷機は、人々に新しい「マス・コミュニケーション」の手段を与えただけでなく、国際関係を含む社会構造を大きく変えるきっかけとなった。本講義では活字メディアが社会の中で果たしている役割と、インターネットの登場によって始まった「印刷革命」以来とも言える大変革期の実相について理解することを目標とする。座学を中心とするが、理解を深めるために一部の授業で簡単な実習やグループディスカッションを取り入れる。理解度を測り知識を確実に定着させるため、授業中に小テストやリアクションペーパーを課すことがある。	
		新聞論	新聞業界は変革期を迎えている。メディア不信の高まりや活字離れの加速を背景に発行部数が減少。一方でデータジャーナリズムをはじめとする調査報道や、電子メディアへの転換など新しい試みも広がっている。本講義ではメディア論の基礎や、新聞産業の構造変化などを学ぶと同時に、それらを踏まえて報道を批判的に読み解く能力を身に付けることを目標とする。座学を中心とするが、メディアリテラシーを高めるため実際の記事を用いた実習やグループディスカッションを取り入れる。理解度を測り知識を確実に定着させるため、授業中に小テストやリアクションペーパーを課すことがある。	
		広告論	授業内で下記(1)～(4)を実施する。 (1)テキストを用いた講義により、広告の関連分野の全体像を理解する。 (2)社会学・経営学・商学（・文学）など、学際間での着眼点や学術的アプローチの違いを知り、広告に関わるジャンルや考え方の多様さに気づく。 (3)日常的に接する、企業・団体等の行う広告やプロモーション活動について、学問対象として考察・判断できる知識を身につける。 (4)所与のプロモーション課題を提示し、広告による適切な方法論を検討する。	
		インターネットコミュニケーション論	オックスフォード・ディクショナリーズは2016年の「今年のことば」に「ポスト・トゥルース (post-truth)」をあげ、コリンズ・ディクショナリーは2017年の「今年のことば」に「フェイクニュース」をあげた。「ポスト・トゥルース」とは、「世論が形成されるにあたり、客観的事実ではなく、感情や個人的な信念がより強く影響を及ぼすような状況」であるとされている。主にインターネットを中心とする私たちのコミュニケーション環境がそのような状況下にあることが仮に事実なのだとしたら、私たちはどのような方法または態度でこのインターネットというメディアに接していけばよいのだろうかについて考えていく。	
		マルチメディア論	元を乱せば「メディア」という言葉は「ミーディアム」の複数形であるから、メディアについて考えることは即ちマルチ（多数から構成される）メディアについて考えることでもある。とはいえ、現代のようなマルチメディア環境は、レディメイドのものとしてそこにあったわけではない。そこで本クラスでは、メディア技術の発達史と、それに伴う私たちのコミュニケーションの様相や感受性の変化との関係というものに視点をおき、いわゆるマルチメディアなるものについて考えていくことにする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	メディア社会学分野	ネット報道論	インターネットの登場は、報道の世界を劇的に変えた。参入障壁がなくなったことでテレビや新聞といったオールドメディアの独占が崩れ、新興勢力が台頭。一方でフェイクニュースが問題になるなど混乱も生じている。本講義では、そうした構造変化や基本的なメディア論を踏まえた上で、ネット時代の報道を読み解くリテラシーを身につけることを目標とする。座学を中心とするが、メディアリテラシーを高めるため実際の記事を用いた実習やグループディスカッションを取り入れる。理解度を測り知識を確実に定着させるため、授業中に小テストやリアクションペーパーを課すことがある。	
		放送メディア論	多様な情報・メディアの中から、どう真実を捕らえれば良いのか。テクノロジーの進歩は、受信するだけでなく、誰でも簡単に情報を発信できるような環境を整えた。放送メディアやジャーナリズムの現場の実情と課題を学び、情報社会の中で生き抜くための視点・ノウハウを学ぶ。放送・テレビメディアの特質と最新状況を理解し、時代と社会に寄り添って真実を探求・判断し正しく伝える方法やの要諦と、多メディア社会を展望する、未来への視点も深める。身近なメディアと自分たちの関係を自覚することからスタートし、テレビ・映像メディアの仕組みをその歴史、背景、実例と共に学びながら、事実や真実とどのように向き合い、読み解いていくかを考える。メディアの消費者から発信者へと視点を広げ、映像・放送メディアの果たすべき役割や未来の在り方まで考察を広げたい。ミニ番組制作入門などを通じて、真実を掴み、正しく自らの言葉で表現・発信するという、コミュニケーションの基本姿勢を学ぶ。放送メディアの現場を訪れるフィールドワークも行いたい。テレビや放送に抱いていたイメージや「常識」を、現場や舞台裏のエピソードで覆し問い直していく。世の中を見る目が立体的になり、自分を伝える力を養えるよう、皆さんと授業を作っていく。	
		映像コミュニケーション論	現代のメディア社会では、「映像」を使って表現する能力は「言葉」を使う能力と同じように重要です。映像コミュニケーションの特性や発展の歩みを学び、現代社会の中で位置づけます。私たちの生活・社会の中で大きな位置を占める「映像コミュニケーション」の特性や発展の歩みを現代・未来に位置づけるために、歴史、背景、実例と共に学んでいく。多様な表現方法、表現ツールが発展する中で、映像文化と如何に能動的・創造的に関わっていくか。映像を制作者、消費者の両面から、文化・産業構造、メディア状況からなど、多角的、立体的に捕えることによって、現代社会の中の位置づけを考察していく。映像産業・映像文化の最前線の現場も訪問する。過去から最新・最先端の作品まで、優れた映像作品を毎回紹介・鑑賞しながら考察を深めていく。	
		メディア制作演習	自ら広く取材して、事実・真実を発見し、自らの表現で相手にきちんと届けるコミュニケーションができること。正しい事実を伝え、感動を与え、社会を豊かにするメディアコンテンツの制作の基本を学びます。映像メディアの制作・情報発信の基礎となる技術や方法を体得し、制作者・送り手の立場からメディアの総体を理解していきます。学生個人やグループで企画し、スマホやビデオカメラで撮影し、PC等で編集作業とポストプロダクションを行い完成させ、上映・講評まで一連で学びます。受け身の授業ではなく、ワークショップ形式の「アクティブラーニング」を目指します。キャンパスのある吹田市を舞台にして、映像制作を進める予定で考えています。	
	社会心理学分野	社会心理学概論	恣意的、ランダムに行われているかのように見える、そしてついそのように自覚してしまう人間の行動や心の動きの背景に、実はある法則性があるのではないかと考え、それを解き明かしてみようと試みる学問が社会心理学である。1年次配当の「社会と心理」というクラスでその広大な知見の一部を垣間見てきたその知見を、このクラスではより一層掘り下げていくことにする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門教育科目	専門科目	社会心理学分野	社会と個人	社会的環境の中で、人の心と行動の仕組みについて人がどのような状況でどのような行動を示すかについて理解する。本授業の到達目標は、(1) 社会心理学の基本概念の理解を深め、人と社会とのかかわりの中で適応する。(2) 人の心の仕組みを、他者とのかかわりの中で考察することができる。である。この講義では、社会的な生活における個人の行動に焦点を当てて、他人から見た自分や、自分から見た他人に対するイメージが形成される過程や要因について学ぶ。そして、実験や観察から得られた事例やデータを学びながら人がなぜ、そう感じ、そう行動するのかを心理学的な観点から理解を深めていく。基本的に講義形式で行い、必要に応じてグループワーク等を用いた演習を行う。	
			動機づけの心理	私たち人間が行動を起こすとき、それは外的・内的な刺激に対して単に生物として反応しているというわけではない。私たちには、刺激とそれに対する反応を媒介する「心」と「身体」というものがある。その「心」と「身体」が働くメカニズムを研究するのが、「動機づけ研究」という学問の一分野ということになる。本クラスでは、この「動機づけ研究」が解き明かそうと試みてきた「動機づけ現象」について、基本的な知見を理解していく。 (オムニバス方式/全15回) (⑥ 李艶/8回) 第1回の動機づけとは?から第8回の認知的動機づけ#2動機づけの認知的理論までを担当する。 (① 黒岩督/7回) 第9回の動機づけの発達から第15回のこれまでの授業の振り返りまでを担当する。	オムニバス
			認知心理学	ヒトの心理過程を情報処理的側面から探求するのが認知心理学である。本授業では、ヒトの主要な認知メカニズムについて学ぶことを目的とする。以下の内容を本授業の到達目標とする。 1) ヒトの認知機構について理解すること。 2) 認知機能の障害について理解すること。 本授業は、注意、記憶、知識、思考などヒトの認知についての様々な研究を紹介し、ヒトの認知過程およびメカニズムについての理解を深めることを目指す。 授業の方法 1) PowerPointや映像資料を使って、主として講義形式により、それぞれのトピックの解説を行う。 2) 各トピックについて的小テストやレポートが課される。	
			知覚心理学	本授業では視覚を中心に知覚について解説し、ヒトの知覚および行為についての考察を行う。以下の内容を本授業の到達目標とする。 1) 感覚・知覚の基礎過程とその障害について理解すること。 2) 知覚と行為について理解すること。 本授業は、視覚システムおよび他の知覚システムについての様々な研究を紹介し、知覚システムおよび行動についての理解を深めることを目指す。 授業の方法 1) PowerPointや映像資料を使って、主として講義形式により、それぞれのトピックの解説を行う。 2) 各トピックについて的小テストやレポートが課される。	
			生理心理学	本授業は、心的機能の基盤となる脳の構造、心拍数、呼吸、皮膚電気活動などの調整を司る自律神経系の機能の生理学的な基本事項を理解することを目的とする。また、ポリグラフ検査をはじめとする生理心理学的な測定法による実践例・研究例の学習を通して、日常生活における心と体の関係についての理解を深める。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門教育科目	専門科目	社会心理学分野	対人関係論	<p>本授業では、社会的相互作用に伴う様々な対人関係について社会心理学的観点から考える。以下の内容を本授業の到達目標とする。</p> <p>1) 対人関係に関する心理学的知見を理解すること。</p> <p>2) 学修した内容を実生活の対人関係に応用できること。</p> <p>本授業は、対人関係に関する様々な研究を紹介し、複雑な現代社会における対人関係についての理解を深めることを目指す。</p> <p>授業の方法</p> <p>1) PowerPointや映像資料を使って、主として講義形式により、それぞれのトピックの解説を行う。</p> <p>2) 各トピックについて的小テストやレポートが課される。</p>	
			コミュニケーション論	<p>私たち人間は、他の生き物とは決定的に異なる手段を使ってコミュニケーションを取り交わす。それが「ことば」である。この「ことば」というもののおかげで私たちは、たとえば発明されてからたかだか100年少々しか経っていない飛行機という乗り物を平気で利用できてしまうような環境を作り上げたのだとも言えるし、また一方で他の動物にはあまりみられない自意識というものを持つことであれこれ思い悩むようになったとも言える。文化と文明、そして自意識、人間を他の生き物と分けるこれらの要素が、すべて「ことば」なくしてはありえなかったといことである。この実に深遠なテーマを、あまり深くない担当教員共々考えてみようではないか、というのが本クラスの肝である。</p>	
			犯罪心理学	<p>犯罪・非行の概況について、統計を読むことで、犯罪を客観的にとらえる視点を養う。基本的な法律用語を押さえながら、事件処理の流れについて学ぶ。犯罪理論について、心理学・社会心理学・生物学の観点から学ぶ。犯罪捜査の方法、精神鑑定、医療観察法について学ぶ。犯罪者処遇について、社会がどのように犯罪に対応しようとしているのか、課題が何であるのかを知る。被害者の抱える課題について、事例をとおして共感的に学ぶ。DV事例について、理解と支援について学ぶ。</p> <p>家裁調査官として少年事件、家事事件に携わってきた経験をもとに、非行少年像や家事事件の当事者について、多面的な理解を伝えていきたい。</p>	
			社会と集団	<p>個人の行動から組織の行動、群集行動や、国民全体の行動まで人が大勢集まった中で発生する現象や現象について、社会心理学のアプローチから考察する。本授業の到達目標は、(1) 人の心理および集団心理の仕組みを理解する。(2) 社会心理学の概要を、集団とのかかわりの中で考察することができる。である。この講義では、日常生活の中で起こる、人の心と行動の不思議と仕組みについて集団心理学、群集心理学に焦点を当てて学ぶ。また、人が集団の中にいることで起こり得る争いや結束といった事象や、リーダーシップなど集団の中での役割について理解する。そして、様々な実験や観察から得られた事例やデータを学びながら人がなぜ、そう感じ、そう行動するのかを社会心理学的な観点から理解を深めていく。基本的に講義形式で行い、必要に応じてグループワーク等を用いた演習を行う。</p>	
			意思決定の心理学	<p>この授業は意思決定の心理的基礎、意思決定のプロセスについて学習する。到達目標として、①意思決定の基礎概念・基礎理論を理解し身に着ける。②現実問題に直面するとき、正しく判断・決断のスキルを養う。③社会、他者の選択に関して、意思決定の観点から説明・解釈できるようになる。の3点を掲げる。授業は基本的に講義形式で行う。この授業は意思決定の基本概念、基本理論、意思決定の段階、意思決定の要素、意思決定のミス（ヒューマンエラー）、消費者の意思決定、人生における三大選択の内容について、それぞれ説明する。</p>	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	社会科学分野	行動科学	<p>行動科学とは、人間や動物の行動を科学的に分析し、行動の諸現象を理解し、行動の諸問題を解決することを目指した科学である。以下の内容を本授業の到達目標とする。</p> <p>1) 人が周りの環境を知覚・認知し、どのように行動しているかを理解すること。</p> <p>2) 人が社会的な環境の中でどのように振る舞い、また選択・意思決定しているかを理解すること。</p> <p>本授業は、人間および動物の行動についての（心理学を含む）様々な分野の研究を紹介し、行動の基礎にある原理の科学的な理解を深めることを目指す。</p> <p>授業の方法</p> <p>1) PowerPointや映像資料を使って、主として講義形式により、それぞれのトピックの解説を行う。</p> <p>2) 各トピックについて的小テストや中テストが課される。</p>	
		経済心理学	<p>近代経済学は長らく、合理的に行動するロボットのような人間（ホモ・エコノミクス）を想定してきた。しかし近年、心理学や実験を導入し、より「人間らしい」個人を前提に理論を組み立てる動きが広がっている。こうした分野は行動経済学、実験経済学、神経経済学などと呼ばれる。本講義では、その代表的な理論を学び、伝統的な経済理論との違いや共通点を理解する。</p>	
		人間と文化	<p>本授業では、人間と文化の関係について主に文化心理学的観点から考える。以下の内容を本授業の到達目標とする。</p> <p>1) 文化に関する心理学的知見を理解すること。</p> <p>2) 学修した内容を実生活における問題に活用できること。</p> <p>本授業は、文化心理学に関する様々な研究を紹介し、現代社会における人間と文化の関係についての理解を深めることを目指す。</p> <p>授業の方法</p> <p>1) PowerPointや映像資料を使って、主として講義形式により、それぞれのトピックの解説を行う。</p> <p>2) 各トピックについて的小テストやレポートが課される。</p>	
		人間と音楽	<p>本授業では、人間にとって身近な事象である「音楽」を取り上げ、人間と音楽の相互作用について心理学的な観点から多角的な理解を促すことが目的である。そのため、視聴覚教材などにより具体的なイメージを伴った理解を促すとともに、心理学的な研究例を積極的に概説することで、数量的なデータを読み取る分析力、判断力、思考力の涵養を目指す。</p>	
		宗教と社会	<p>グローバル化が進む現代社会において、ビジネスや地域社会のなかで、言語や宗教が異なる人々と出会い、ともに活動する機会が増えている。授業の前半（1～7回）では、宗教の異なる人々が共生する社会において起きている新しい現象について学ぶ。事例としては主に日本や欧米での文化・社会現象を扱う。後半（8～15回）では、世界各地の最新の宗教事情について学び、政治・経済と宗教がどのようにかかわっているかについて考察を深めて行く。</p>	
	関連科目	グローバリゼーション論	<p>グローバリゼーションという現象がどういうものか、総論から各論を網羅し、具体的なテーマで理解を深める。総論では、歴史や制度を通じて、グローバルな認識枠組みの基本的な構成を解説する。続いて、安全保障や経済、地球環境などの各論の中でグローバリゼーションを位置付けた上で、現在のグローバル化の中で、タイムリーに議論されている個別のテーマを挙げて、その趨勢を探る。講義が中心になるが、双方向的なやり取りを目指す。</p> <p>この授業では、基本軸を「国」ではなく「世界」（グローバル）の概念で進んでいく。</p>	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門教育科目	専門科目	関連科目	日本の地域文化	テキストを用いて照葉樹林文化論とブナ帯文化論の概要を把握し、日本の森林文化に関する考察を深める。その上で、森林で行われた生業としての焼畑、木器生産、狩猟・採集、鉄生産について、翻刻された近世史料と映像、地図類、担当者の撮影による写真を多数提示しつつ、その実情を検討していく。あわせて、日本の国土に関する理解を深める。	
			社会と子ども	現代社会や学校教育の今日的課題を認識し、それを解決する方法を具体的な事例に即しながら考えていく。また教育の概念を狭くとらえるのではなく、文化の創造や人間の成長に果たす役割について深めていく。 講義形式と演習形式を併用する。演習では受講生を小グループに分けて、グループ毎に課題解決に対しての協議を行う。	
			人間と暮らし	我々が暮らす現代社会において、自らを取り巻くすべてのものは何かしらのデザイン（design：何らかの計画を記号に表す、方向付ける、を意味するラテン語：designareが語源）がなされたものである。本講義では、人間の暮らしの様々な領域におけるデザインされた事象を学び、デザイン思考の観点から、社会、文化、日常生活、地域社会…など、人間の暮らしに関わる様々なレベルの事象を捉え、論じることができるようになることを到達目標とする。 参考文献や資料を用いて、現代に生きる我々を取り巻く三つのエコロジー（物質形態学的、社会的、精神的+情報…の環境）とそこでの暮らしについて、デザイン思考の観点から学ぶ。 各授業の最後に、コメントシートを配布し、意見や感想を書いてもらう。それらを次回の講義の冒頭で紹介、質問に応えながら、講義を進める。	
			地域研究	都市への人口集中やそれに伴う過疎の問題、また都市における団地の老朽化・高齢化など、日本でも「都市」をめぐる問題を耳にすることは多い。授業では、ヨーロッパにおける都市の成立と発展、同時代の都市問題などを通じて、近代化とそれに伴う社会の変動について理解していく。また、都市化の反動として現れた田園や自然への憧れ、農村文化の保護などについても取り上げる。各自で、日本での都市問題をめぐる報道などにも注目し、比較しながら考察を深めて欲しい。	
			資源論	この授業では、大気、水、食料や生物といった我々を取り巻く基礎的資源のほか、石炭、石油などの火力エネルギー、太陽光や風力などの再生可能エネルギーのほか、原発の問題を解説する。毎回、話題になっている関連のニュースを取り上げ、解説した上で授業のテーマと直結させる。 講義が中心となるが、双方向的なやり取りも用いる。それぞれのテーマごとに、課題を提示するので、本や資料、ネットから情報を収集して、与えられた課題をクリアすることを目指す。	
			都市と空間	本講義では、都市社会学の視点から、都市とはどのような特徴を持ち、どのような変化を遂げてきたのか。そしてどこに向かおうとしているのか。このことを捉えるための視点と方法論について、これまで都市社会学が蓄積してきた知見と方法を中心に、その課題や諸問題も含めて事例紹介を通じて学ぶ。各授業の最後に、コメントシートを配布し、意見や感想を書いてもらう。それらを次回の講義の冒頭で紹介、質問に応えながら、講義を進める。 (オムニバス方式/全15回) (③ 蘭信三/9回) 第1回のオリエンテーション：都市・都市社会学とは？、第2回都市空間の発展の歴史から第8回のインナーシティ問題とゲッター・スラムまで、第15回のみを担当する。 (19 立花晃/8回) 第1回のオリエンテーション：都市・都市社会学とは？、第9回の都市的なるものと日常生活から第14回のAI社会と第三の空間まで、第15回のみを担当する。	オムニバス

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門 教育 科目	専門 科目	関連 科目	まちと美術館	本講義では、博物館法に位置付けられる美術館の基本的な機能のみならず、“まち”や“地域”においてミュージアムが担う多様な機能と役割についての事例紹介や、ビジュアル資料を用いて様々な側面から解説する。 各授業の最後に、コメントシートを配布し、意見や感想、課題についての考えを書いてもらう。それらを次回の講義の冒頭で紹介、質問に応えながら、講義を進める。	
			生涯学習概論	本授業では、①生涯学習及び社会教育の意義と現状、生涯学習の課題、学習機会の充実に向けての取組について学び、理解を図る。また、②情報化・グローバル化する社会で暮らす我々は、日々複雑な課題に取り囲まれて生きている。学校教育終了後の持続的な学習を保障する場の一つとして、図書館には、地域における学習・成長のための役割が期待されており、その機能・制度についても理解を深め、③図書館司書として必要な生涯学習の基礎的知識を修得し、現場での対応力の基礎を身に付ける。	
			文化人類学	世界には様々な人々がいてそれぞれに日常がある。その「日常」を「日常」たらしめているのが文化である。本講義では、日常を浮かび上がらせる学問である文化人類学の基本的な考え方を学んでいく。そして、人類にとって文化とは何か、自らの日常と照らし合わせながら考える力を身につける。	
			報道の現場	授業では記者やカメラマンたちが出向く実際の現場を仮想体験してもらい、考える力を鍛え、身の回りで起きている社会問題を気づかせる。報道機関の編集局では社会部、政治部など担当によって部局がわかれており、授業では部局ごとに報道現場の実態を検証材料にして考察する。実際のニュース記事やニュース映像、TwitterなどのSNSでの反響ぶりなども提示し、高度情報化時代に報道現場がどのように進化しているかも解説する。	
			国際報道論	授業では4つのパートにわかれる。①海外ニュースが作られる編集フローと特派員の仕事ぶり、さらには主な情報ソースを紹介②実際の解説記事、ルポルタージュ、コラムなどを紹介し、その内容がどのように構成されているかを考察③慰安婦問題における日韓の報道ぶりの違い、北方領土問題における日露の報道ぶりの違いなど具体的なテーマを出して、バイアス報道とは何か、真実とは何かを考える④トランプ大統領のツイッター発言、五輪、W杯公式SNS情報などがあり方を変える国際報道のいまについて講義を進める。普段あまり目にすることのない各国の報道ぶりを取り上げ、メディアリテラシーも考察する。	
			スポーツ報道論	授業では、スポーツの現場の最前線で活躍するジャーナリストの記事、ルポルタージュ、テレビ番組などを紹介しつつ、そのニュースがどのように編集され、世に送り出されているかを解説する。スポーツジャーナリストも講師として招聘し、取材現場の実態を報告してもらう。スマートフォンが媒介となる高度情報化時代となる中で、ラグビーW杯の公式ツイッターがどのように大会を盛り上げたか、東京五輪・パラリンピックにおけるネット報道がどうだったのかも資料として使う。	
			オリンピック論	授業では、日本社会の発展に大きな影響を与えた2020年東京五輪・パラリンピックの舞台裏、生み出した新たな現象などをつぶさに追いながら、オリンピックやパラリンピックがもたらす「レガシー」（遺産）とは何なのかを履修者に習得してもらう。選手に迫ったルポルタージュや密着ドキュメント、企業が生み出した新技術やシステムの情報、人権問題、女性の社会進出、格差社会は正に迫った解説記事などを提示する。パラリンピックの理念である共生社会実現に向けたテーマも取り上げる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門教育科目	専門科目	関連科目	伝える文化	授業内で下記(1)～(3)を実施する。 (1)各回のテーマの概要を参考資料を提示しながら説明する。 (2)テーマに即して、グループワークまたは個人ワークで実践的な演習(練習と発表)を行う。 (3)発表例を素材とした発展的な問題を提起し、参加者はチェックシートを作成することで理解を深める。 予習・復習として、発表に適した事例を準備する。	
			広告史	各時代の広告界を、「メディアビジネス」「クリエイティブ」「マーケティング・コミュニケーション」の3視点から解説する。 時代の連続性(または非連続性)を理解するために、社会・文化等の史的展開を広告史と並行して学習する(予習等で、当該時代の日本・世界の情勢についての基礎的理解を促す)。 各時代の代表的な広告やプロモーションの事例を、印刷物・音声・映像等で紹介し解説する。 史料、オーラルヒストリー、アーカイブの扱い等、歴史研究の基礎やスタンスを解説する。	
			PR論	授業内で下記(1)～(3)を実施する。 (1)テキストを用いた講義により、広報・PRおよび関連分野の全体像を理解する。 (2)個々の事例研究として、毎回、日常的に耳目に触れる、組織・法人・行政機構などからの情報発信例を取り上げ、目的・背景・方法などと、効果や目的達成の程度について考察する。 (3)発展演習として、課題事例を提示し、その適切な広報・PRの方法論を検討する(グループワークまたは個人ワーク)。 予習・復習として、「関心がある・興味深い事例」を収集・研究し発表できるようにする。	
			コミュニティ心理	コミュニティ心理学は、学校・教育、家族・家庭、ジェンダー、介護・福祉、青年のキャリア支援、職場、精神障害者などの社会復帰支援、災害や犯罪の被害者支援、異文化共生、地域・環境など、さまざまな分野における問題を研究と実践の対象としている。本講義では、コミュニティ心理学の基礎的な定義、その歴史、理論的背景や、社会参加・援助の方法について概論的な解説をおこない、現代のさまざまな心理的問題について、その社会的背景を含めて必要な概念と方法論について説明できるようになることを到達目的とする。参考文献や資料を用いて、現代の都市部や地域社会のコミュニティにおけるさまざまな心理的問題やへの援助方法や課題解決を目指す事例について、コミュニティ心理学的アプローチを中心に紹介する。各授業の最後に、コメントシートを配布し、意見や感想を書いてもらう。それらを次回の講義の冒頭で紹介、質問に応えながら、講義を進める。	
			心理測定法	直接見ることができないヒトの心理過程を測定により明らかにしようとするのが心理測定法である。以下の内容を本授業の到達目標とする。 1) 主要な測定法の特徴について理解すること。 2) 測定の際に適切な測定法を選択することができること。 本授業は、心理学における代表的な測定法についての解説を行い、実際に体験しながら測定法の特徴を理解することを目指す。 授業の方法 1) PowerPointや映像資料を使ってそれぞれのトピックの解説を行うとともに、測定法を体験する。 2) 各トピックについて的小テストや中テストが課される。	
心理学実験 I	本授業では、心理学における実験的な研究の技法や心理実験の実施に必要な基礎的知識を学ぶ。また、数量的なデータの整理・分析方法を学び、実験レポートの作成に必要な基礎力を養成することを目的とする。そのため、受講生は実験によって得られたデータを用いて、データの整理、統計分析およびレポートの作成をする。各回とも授業の事前学習として実験計画の作成が指示され、同じく事後学習として「標準的レポート」の執筆以前に、「方法」「結果」の2つについて課題が提示される。その課題については、受講生相互にポイントを押さえた執筆ができていないかを確認し合い、不備があればその指摘に基づき、レポート提出までに修正をする。なお、この授業は毎回2時限(2コマ)連続で行う。				

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門教育科目	専門科目	心理学実験Ⅱ	本授業では、心理学実験Ⅰで学習した心理実験に関する基礎的な知識をさらに深めるとともに、実践的な理解を深める。また、数量的なデータの分析に必要な統計的手法のスキル、実験レポートの作成に必要な分析力、論理的思考力をさらに高めることを目的とする。そのため、受講生を複数の小グループに分けて受講生相互に実験者と実験参加者となることで授業内に実験を実施し、自分たちが計画した実験によって得られたデータを用いて、データの整理、統計分析およびレポートの作成をする。各回とも授業の事前学習として実験計画の作成が指示され、同じく事後学習として「標準的レポート」の執筆以前に、「方法」「結果」の2つについて課題が提示される。なお、この授業は毎回2時限（2コマ）連続で行う。	
	基礎・専門演習科目	基礎演習	この授業は、入学直後の1年次生が高校時代の受験「知」と訣別し、大学における本格的な「知」の営みの現場に入るための入門コースである。社会学部で4年間を過ごすための学習のガイダンスであり、社会学の基礎概念・理論について理解するとともに、文献・資料の収集方法、レポートやレジュメの作成方法、口頭発表（プレゼン）・討論のしかたなどを学ぶ。	
		専門演習Ⅰ	1年次の「基礎演習」を終えた2年生に対し、3年次の「専門演習Ⅱ」につながることを想定して、さらに研究の技法と考察のしかたについて学ぶことを目的とした授業である。この授業では、いくつかの具体的なテーマをとりあげて課題を見つけ、課題解決に向けた資料や文献を輪読し、研究の成果を発表するとともに議論し、社会学の理論や概念などがどのように関連し、結びついているかを学習してもらう。 いずれの課題も作業は授業以外の時間を使うことになり、またグループでの作業も想定されている。受講生一人ひとりの積極的な取り組みがなければ成果は望めない。研究の技法や議論のルール以外にも、協力して作業を進めてゆくことの重要性も実践的に学習してもらう。	
		専門演習Ⅱ	2年次の「専門演習Ⅰ」を終えた3年生に対し、4年次の「卒業研究」につながることを想定して、さらに研究の技法と考察のしかたについて学ぶことを目的とした授業である。この授業では、学生がグループごとにいくつかの具体的なテーマをとりあげて課題を見つけ、課題解決に向けた資料や文献を輪読し、研究の成果を発表するとともに議論を深める。 いずれの課題も作業は授業以外の時間を使うことになり、またグループでの作業も想定されている。受講生一人ひとりの積極的な取り組みがなければ成果は望めない。研究の技法や議論のルール以外にも、協力して作業を進めてゆくことの重要性も実践的に学習してもらう。	
卒業研究	卒業研究	卒業研究は年間を通じて、教員が受講生それぞれの進捗状況に応じた丁寧な指導を行う。まず研究の方法・進め方について学び、研究テーマを設定する。その後は教員の指導のもと、個別に研究計画を立て、先行研究や資料の収集と分析、問いや仮説の検証を行う。中間報告会を実施し、質疑や議論を踏まえた上で卒業論文の執筆を行う。研究報告会を経たのちに、論文を提出する。		
自由選択科目		中等教科教育法（社会）Ⅰ	中学校社会科（地理・歴史）の学習目標と内容を理解したうえで、実際に授業を行う際の基本的技能（以下に示す）を習得する。 1) 学習指導要領について理解し説明ができるようになる。 2) 教材研究を行ったうえで、授業計画（特に単元構想）を立案し、学習指導案を作成できるようになる。 3) 学習指導案に沿って、授業を行うことができるようになる。 中学校社会科の学習目標及び内容を理解したうえで、授業を行う際に必要な基礎的技術を身に付けられるようにする。授業は、分野としては、地理的分野と歴史的分野を扱う。子ども理解や教材開発・授業方法に関しては、内容と関連させながら講義を構成していく。学習目標及び内容については新学習指導要領への移行の趣旨、目的、内容の変更を理解できるようにする。授業実践に関しては、教材研究を十分おこなったうえで、学習指導案を作成し、模擬授業を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自由 選 択 科 目	中等教科教育法（社会）Ⅱ	<p>中学校社会科（公民）の学習目標と内容を理解したうえで、実際に授業を行う際の基本的技能（以下に示す）を習得する。</p> <p>1) 学習指導要領について理解し説明ができるようになる。</p> <p>2) 教材研究を行ったうえで、授業計画（特に単元構想）を立案し、学習指導案を作成できるようになる。</p> <p>3) 学習指導案に沿って、授業を行うことができるようになる。</p> <p>これを踏まえ、中学校社会科の学習目標及び内容を理解したうえで、授業を行う際に必要な基礎的スキルを身に付けられるようになる。授業は、分野としては、公民分野を扱う。子ども理解や教材開発・授業方法に関しては、内容と関連させながら講義を構成していく。学習目標及び内容については新学習指導要領への移行の趣旨、目的、内容の変更を理解できるようにする。授業実践に関しては、教材研究を十分おこなったうえで、学習指導案を作成し、模擬授業を行う。</p>	
	中等教科教育法（地歴）	<p>高等学校学習指導要領地理歴史（平成30年3月）の趣旨と特長を理解すること。内容構成は、「地理総合」では、(1)地図や地理情報システムで捉える現代世界 (2)国際理解と国際協力 (3)持続可能な地域づくりと私たち 「地理探究」では、(1)現代世界の系統地理的考察 (2)現代世界の地誌的考察 (3)現代世界におけるこれからの日本の国土像 「歴史総合」では、(1)歴史の扉 (2)近代化と私たち (3)国際秩序の変化や大衆化と私たち (4)グローバル化と私たち 「日本史探究」では、(1)原始・古代の日本と東アジア (2)中世との日本と世界 (3)近世の日本と世界 (4)近現代の地域・日本と世界 「世界史探究」では、(1)世界史へのまなざし (2)諸地域の歴史的特質の形成 (3)諸地域の交流・再編 (4)諸地域の結合・変容 (5)地球世界の課題 などを概観できるようになります。先行授業実践を批判的に吟味し、考察します。アクティブ・ラーニングを考慮した教育方法論を具体的事例を示して理解してもらいます。新高等学校学習指導要領地理歴史の趣旨と特長に基づいて学生全員がオリジナルな学習指導案を作成し、模擬授業をして、お互いに評価します。</p>	
	中等教科教育法（公民）	<p>公民諸科目の内容構成について、学生が概観できるようになります。その内容は、必修科目の「公共」では、まず私たちの生きる社会を公共空間と捉え、一人一人が公共空間をつくる主体として、現代の諸課題の解決に向けて参画することの意義や人間としての在り方生き方、公共空間の基本的原理を学び、他者と協働しつつ持続可能な社会づくりについて考察させます。選択科目の「倫理」では人間としてどう生きるべし、自己の課題や現代の課題と関連付けて思索します。「政治・経済」では社会はどうあるべきか、政治や経済の視点から日本と国際社会を対象に探究させます。教科原理、歴史、目標、内容編成、授業構成、評価について原理・理論を整理し、授業実践を詳述します。学生が授業分析、教材研究、学習指導案作成などができるようになり、アクティブ・ラーニングを組み入れ、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」、つまり「主体的に学習に取り組む態度」を育成する模擬授業を実践します。そして、各自が自分の学習指導案と模擬授業を振り返り、学生が相互に意見交換してそれぞれの模擬授業を吟味し、考察してもらいます。</p>	
	教育学概論	<p>本授業は、教育および教育学の基礎概念、近代の教育思想、教育の歴史の、大きく三つの内容から構成されている。基礎概念に関しては、単に概念を定義して説明するにとどまらず、自らの学校経験の振り返りや歴史的事実と関連させてその意味を説明する。教育思想に関しては、代表的な近代の教育思想家の思想を深く理解させることを通して、家庭や子供、学校や学習、指導法などについての考え方を示す。日本の教育については、江戸時代以降、今日にいたる学校教育の歴史の変遷を、家庭や社会の変化とかがかわらせて講義し、現代社会における教育課題を歴史的視点から捉えることができるようにする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自由 選択 科目	教育基礎論	「教育とは何か？」を入口に、教育の大切さを学ぶ。それを元に学校教育と社会教育の役割の相違点を考えていく。そして学校教育に焦点を当て、教育課程の意義や役割を考え、実際に作ってみる体験を通して理解を深めていく。自分で作成した教育課程を元に教育目標の構造、目標達成のための方法をグループワークで考えていく。さらに生徒指導に必須のカウンセリングマインドについて、従来の来談者中心のカウンセリングとの違い、その方法を解説したのちにワークショップを通して理解を深める。終盤には既習の学習内容を元に「いじめ」「不登校」「持続可能な社会」「society5.0」など教育を取り巻く現代的課題について学校教育の役割と子どもを取り巻く環境の変化の視点から考えていく。講義形式と演習形式を併用する。演習では受講生を小グループに分けて、グループ毎に課題解決に対する協議を行う。	
	教師論	教職の専門職性を切り口に教職の意義、役割、職務内容について、原理論、制度論、具体的事例からアプローチする。前半は教師の仕事についてグループワークを通して網羅的に洗い出し、その専門性を労働者論と聖職論の両面から考えていく。中盤では現代社会における教師の社会的立場を教育公務員の視点から具体的に捉えられるようにする。そして教師の専門性とは何かを系統主義と経験主義という2つの視点と学校教育の歴史に触れながら深めていく。後半では学校教育の今日的課題として学級担任の視点に立ち「いじめ問題」「不登校問題」「特別支援教育」についてケーススタディを中心に具体的な場面を想定して、その予防と対応について考える。講義形式と演習形式を併用する。演習では受講生を小グループに分けて、グループ毎に課題解決に対する協議を行う。	
	教育心理学	教育場面における効果的な学習指導やそれを支える学級経営に求められる心理学的理論と知見を教示する。「学び育つ主体」、「学びのプロセスとメカニズム」、「学習指導と学習評価」、「学びの場と教師」のテーマに即して、理論や知見を教示していく。「人はどのように成長していくのか」、「学ぶとは、教えるとはどのような営みなのか」、「よりよい教育とは何か」といった問いへの探求を深めるために、学校現場の教育課題に主体的に対応していくための実践的力量形成の基礎となる見方や考え方についてもふれながら進めていく。	
	教育制度論	日本の教育制度の理解の根本は、日本国憲法や教育基本法の内容を十分に理解することにある。また、それらに関する教育法規を通して、「学校」「教職員」や「子ども」「地域社会」などを具体的に理解するとともに、それらが有機的な繋がりを持つものとして考察する。 講義においては、適宜アクティブ・ラーニングを取り入れ、学修の主体性を目指す。	
	教育課程論	教育課程の成立の過程を概観すると同時に、その歴史的意義や社会的重要性について学修する。また、教育課程における学習指導要領の位置づけを確認し、今日までの変遷過程及びその特徴を把握する。その上で、今後の教育課程の在り方を考察する。 講義においては、適宜アクティブラーニングを取り入れ、学修の主体性を目指す。	
	特別支援教育	本授業は特別支援教育の理念、特別支援教育の制度と教育内容に関して基本的な理解を身につけるとともに、障害と障害児理解や支援のあり方について理論と実際の両面から学ぶ。同時に共生社会に向けてのインクルーシブ教育への展望を考える。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自由 選 択 科 目	道徳理論と指導法	本授業では、教科や総合学習・特別活動と道徳教育との関係、生徒指導の場における道徳教育、道徳の時間の運営の各領域にわたってわが国の教育実践例を知り、欧米における道徳教育改革の動向をも踏まえて、道徳教育実践の基礎的能力を身につける。また、戦前・戦後の道徳教育の変遷をたどり、さらにこれまでの道徳教育実践に学び、今、求められる「道徳の授業」とは何かを検討する。また、実際に「道徳の時間」の指導案を書き、模擬授業をすることも視野に入れ講義をすすめる。	
	特別活動及び総合的な学習の時間の指導法	特別活動及び総合的な学習の時間への関心を高めるとともに、指導上の課題を解説する。学習指導要領（新学習指導要領）を検討し、具体的な実践事例等に触れることにより、特別活動及び総合的な学習の時間の実践的な指導力を身に付けさせる。実際に指導する場面を想定した学習指導案の作成や教材研究、模擬授業等を通して実践的な指導力を身に付ける。	
	教育の方法技術	この授業では、主体的学習を導くための教育の方法及び技術について、その歴史的概観、学習指導の形態を学ぶことをねらいとする。そのうえで、教育現場における教材の研究を含めた授業の設計、評価の問題を考えることで教育の方法と技術に関する基礎を培う。また、教育メディアの利用を通じて、自らのICT活用能力の向上をはかるとともに、教育効果を高めるための情報機器及び教材の活用についても修得する。 (オムニバス方式／全15回) (27 堂塾法善／8回) 第1回のオリエンテーション（授業概要及び学習目標の解説）から第8回の学習指導案の作成と発表までを担当する。 (28 松本宗久／7回) 第9回の教育メディアの特徴と学習指導の形態から第15回の学習形態や授業デザインの工夫を担当する。	オムニバス
	生徒・進路指導論	最近の学校現場では「社会化」（socialization）の機能低下が顕在化している。具体的には不登校、低学力といった「不適応」とともに様々な形で現れる「問題行動」がある。こうした問題の背景には個人的な要因の他に明らかに社会的要因がある。この授業では、毎時間「ケース」（事例）を挙げて問題に即して法規的根拠、人権への配慮、具体的な指導法の各視点を理解したうえで、受講者と教員がディスカッションしながら「よりよい指導法」とその根拠を模索する。当事者性を持つこと、教員としてどうするか自分の意見を持つことなどを重視して、問題に複眼的にアプローチする。また、「生き方としてのキャリア」の視点から「社会の中を生きる個人」として自己の生き方設計および他者へのアドバイスを学ぶ。	
	教育相談	教育相談の基本的知識を概説するとともに、その今日的課題を、具体的事例を素材として検討する。また、教育学や教育社会学的視点からの考察を加味しながら、個々の事例を多角的に吟味することを通して、カウンセリングとは異なる「教師の仕事」としての教育相談のあり方を理解するための、一貫した視座の可能性を探る。	
	学級経営	この授業では、年間の学級経営を中心に据え、生徒の発達段階や学校、保護者、地域の願いや要望などから考えられる課題とその予防と解決について考えていく。さらに教師と生徒、生徒と生徒の望ましい人間関係の構築と生徒の発達に対して教師がいかに開発的にアプローチをするかを具体的事例から考察する。講義形式と演習形式を併用する。演習では受講生を小グループに分けて、グループ毎に課題解決に対して協議を行い、全体発表を通して学級経営に対する実践的な方法・技術を検討する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自由 選択 科目	中等教育実習事前事後指導	本講義は、教職の実務経験者による講義で、事前の指導では、その目的、実習の形態、実習への心構え、態度、学校運営や校務分掌、学習指導、道徳指導、特別活動における留意点等について学習するほか、指導案の作成に基づき、実習のための一定の知識と技術を身につけ、事後の指導では、実習記録等に基づいて、教育実習全般を省察することにより、自己評価や新たな課題の分析、教職への適性の自己診断等を行い、実習の成果を確認する。	共同
	中等教育実習 I	授業で学んだ理論と指導法を実践し検証するために学校現場で教育実習に臨む。実習校では、主に次のような教育活動を実体験する。 ①教師の指導活動や生徒の実態を客観的に観察し、学校教育の内容を総合的に理解する。 ②各分掌の担当教諭の指導のもとに、各種の教育活動に参加し教師の仕事を実験的に学ぶ。 ③学級担任や教科担当教諭の指導のもとに、実際の授業や教育指導の一部を自ら実践・実習する。 ④実習校の反省会で、学校長や関係教諭等から指導を受ける。	
	中等教育実習 II	中等教育実習 I を履修して2週間の実習を済ませていることを前提とする。授業で学んだ理論と指導法を実践し検証するために学校現場で教育実習に臨む。実習校では、主に次のような教育活動を実体験する。 ①教師の指導活動や生徒の実態を客観的に観察し、学校教育の内容を総合的に理解する。 ②各分掌の担当教諭の指導のもとに、各種の教育活動に参加し教師の仕事を実験的に学ぶ。 ③学級担任や教科担当教諭の指導のもとに、実際の授業や教育指導の一部を自ら実践・実習する。 ④実習校の反省会で、学校長や関係教諭等から指導を受ける。	
	教職実践演習（中・高）	当演習は、教職の実務経験者による演習で、全学年を通じた「教員をめざす者としての学びの軌跡の集大成」として位置付けられるものである。 当演習を通じて各学生は、今までの自己の学びの過程を振り返ることで自らの課題を明らかにする。また、子ども理解、教科等指導、学級経営などに関する内容を取り上げ、討論、ロールプレイ、模擬授業、事例研究などを行うことで、自己の課題を自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補いその定着を図ることで、教職生活をより円滑にスタートできるようになることをめざす。	共同
	学校経営と学校図書館	学校図書館の教育的意義や経営など全般的事項についての理解を図る。1)学校図書館の理念と教育的意義2)学校図書館の発展と課題3)教育行政と学校図書館4)学校図書館の経営（人、施設、資料、予算、評価等）5)司書教諭の役割と校内の協力体制、研修6)学校図書館メディアの選択と管理、提供7)学校図書館活動8)図書館の相互協力とネットワーク	
	学校図書館メディアの構成	学校図書館の機能を十分に発揮するために、印刷メディア、視聴覚メディア、電子メディアなどの中から学校図書館にとって必要なものを選択、収集し、これらを有効・適切に利用者（児童生徒・教員）にりようしてもらうための手順・方法を学び、司書教諭の具体的な業務について把握する。学校図書館におけるメディアの種類とその特性を明らかにし、学校図書館メディアの構成に関する理解及び実務能力の育成を図る。1)学校図書館メディアの種類と特性2)学校図書館メディアの選択と構成3)学校図書館メディアの組織化4)多様な学習環境と学校図書館メディアの配置	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自由 選択 科目	学習指導と学校図書館	学習指導における学校図書館メディア活用についての理解を図る。 1)教育課程と学校図書館2)発達段階に応じた学校図書館メディアの 選択3)児童生徒の学校図書館メディア活用能力の育成4)学習過程に おける学校図書館メディア活用の実際5)学習指導における学校図書 館の活用6)情報サービス(レファレンスサービス等)7)教師への支 援と働きかけ	
	読書と豊かな人間性	本科目では、学校図書館における読書活動について、その意義と目 的を考える。また、読書教育の歴史や児童文学の変遷についても学 習する。子どもの発達段階に応じた読書教育の大切さを学び、子 どもと本を結び付け、読書を習慣とさせる方法について考えます。学 校図書館と司書教諭の役割と責務を理解し、読書が子どもたちの豊 かな人間性を育むのに果たしている役割を考える。また、多くの児 童書や絵本に触れることにより、作品や指導方法を知り、教育カリ キュラムを支える読書のあり方についても考える。	
	情報メディアの活用	司書に必要な情報リテラシー・情報ネットワークの概念、インター ネットの導入における現在のICTの位置づけ及び管理方法、情報 の評価、情報検索の技術と検索結果の評価、インターネットの利用 における著作権の問題を学習することで、情報メディア社会の特徴 を知り、必要なメディア情報リテラシーを育成する学校図書館と情 報メディア活用の基礎を学ぶ。授業は、コンピュータの実習と講座 を組み合わせて行う。その中で、司書に必要な情報リテラシーや情報 を活用した課題解決、また、今後のIT化の問題点等について確認す る。	
	図書館概論	本授業では、①現代社会における図書館の基本的機能、社会におけ る図書館の意義と役割、図書館の現状と動向、課題など、図書館に ついての基礎的知識を幅広く習得する。具体的には、図書館の歴史 と現状、館種別図書館と利用者、専門職としての司書の役割、関係 機関と関係団体、図書館の課題と展望等について学ぶ。②図書館司 書養成科目の導入となる科目として、図書館に関わる基本的な知 識、用語について、広く理解することもめざす。	
	図書館情報技術論	本科目では(1)図書館業務に必要な、情報通信技術や、情報検索に 関わる基礎知識を習得し、その活用を可能とする。具体的には、図 書館業務システム、データベース、検索エンジン、電子資料、Web情 報発信等について学習する。また、(2)図書館業務への実際の活用 事例についても学習し、同時に、ネットワーク・セキュリティにつ いても理解を深めることとする。(3)情報技術の進歩に伴う図書館 の未来についても考える。授業では随時、演習も行う。	
	図書館制度・経営論	「日本国憲法」、「教育基本法」、「社会教育法」、「図書館法」 などの図書館に関連した法律や制度、政策について解説する。ま た、社会における、組織の経営やマーケティングについて押さえた 上で、各種図書館の経営について理解を深める。図書館に対する社 会のニーズを背景に、今後の図書館の運営について考える。	
	図書館サービス概論	情報環境の整備、進展に伴い、ネットワークを活用して各種の情報 を得ることが容易になってきている。一方で、図書館業務で使用さ れる情報機器も多様化、高度化している。これらの発展は図書館 サービスのあらゆる領域に大きな影響を及ぼしている。図書館では それらの技術を用いて、利用者の情報要求に的確かつ迅速に答えて いかななければならない。そのために図書館サービスの考え方と構造 の理解を図り、資料提供、情報提供、連携・協力、課題解決支援、 障害者・高齢者・多文化サービス等の各種のサービス、著作権、接 遇・コミュニケーション等の基本を解説する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自由 選 択 科 目	情報サービス論	本科目では、図書館における情報サービスの意義と内容を概説し、レファレンスサービスと情報サービスにおける情報源の活用について解説する。専門的なサービスを実施するための基本的な理論や作法を習得することを目的とする。まず、情報サービスにはどのようなものがあるのかを学ぶ。また、図書館で利用者から質問を受けることをシュミレーションし、グループまたは個人で課題に取り組む。さらに、学んだ情報サービスに関する知識を活かし、情報サービスの理想的なあり方について考える。	
	児童サービス論	本科目では、子どもに読む喜びを知ってもらうために公共図書館が行う図書館活動について学ぶ。「子ども読書活動推進法」が制定され、全国の自治体で「子ども読書活動推進計画」の策定が進み、子どもの読書活動の推進が図られている。読み聞かせやブックトークなど、子どもに読書の楽しみを知ってもらうためのさまざまな活動について、実践と共に理解を深める。	
	情報サービス演習	図書館員は、利用者からの様々な質問に円滑に答え、利用者と求める情報とを迅速、的確に結びつけるための知識や技術が要求される。本科目では、図書館における情報サービスの意義や役割についての理解を深め、情報サービスの中核をなすレファレンスサービスや情報検索サービスの基本を学び、様々なタイプの質問を想定し、実際の事例を用いた演習によって、実践的なスキルを習得することを目指す。また、今日、図書館における情報提供サービスでは、紙媒体の情報とともに、コンピュータやネットワークを用いた情報収集が必要不可欠となっている。図書館員は、利用者からの多岐にわたる質問に円滑に答え、求める情報を提供できるよう、紙媒体以外の情報資源についての知識や技術も習得する。	
	図書館情報資源概論	本科目では、①図書館が、その奉仕対象のために必要な資料（図書館情報資源）を収集し組織化し利用に供していることを知り、図書館情報資源について、その構成や類型、特質、歴史などの理解を深める。また、②多様化する図書館情報資源を、有効に活用し機能させるために必要な、選択、収集、保存など、図書館で実際に行われている業務に必要な情報資源に関する知識・技能の習得を目指す。③実際に図書館にて、実物を見ながら授業を進めることも行う。	
	情報資源組織論	印刷資料・非印刷資料・電子資料とネットワーク情報資源からなる図書館情報資源の組織化の理論と技術について、書誌コントロール、書誌記述法、主題分析、メタデータ、書誌データの活用法等を解説する。現代の図書館では書誌ユーティリティの利用による情報資源の組織化が標準になっているが、その基礎となる組織化理論の理解がなければ、情報資源およびその情報の提供を十全に行うことができない。この講義では記述目録法（目録法）と主題目録法（分類法、件名法）について概説する。さらに、機械可読目録（MARC）、書誌ユーティリティについても論じるとともに、書誌コントロールの意義と現状についても解説する。	
	情報資源組織演習	多様な情報資源に関する書誌データの作成、主題分析、分類作業、統制語彙の適用、メタデータの作成等の演習を通して、情報資源組織業務について実践的な能力を養成する。そのために、目録作業、分類作業、件名作業の実際について演習形式で学ぶ。具体的には「日本目録規則」を適用した書誌的記録の作成や書誌ユーティリティの利用方法を学び、「日本十進分類法」に基づいた分類記号の付与作業を行うとともに、件名からのアプローチについて、件名標目表（シソーラス）を例として概説する。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自由 選 択 科 目	図書・図書館史	<p>図書を中心とする記録メディアの歴史と、その保管装置である図書館の歴史を理解することを目標とする。図書館は古来より延々と人類が生んだ記録物を集積・保存し、利用につなげ、次の時代へと継承し、もって未来の思想をつくる役目を果たしてきた。記録媒体の変遷や、日本と外国の図書館の興亡を古代から現代まで概観し、「図書館が存在」することの文化史的意義について学ぶ。必修の各科目で学んだ内容を発展的に学習し、理解を深める観点から、図書をはじめとする各種図書館情報資源の形態、生産(印刷等含む)、普及、流通等の歴史、並びに図書館の歴史的発展について解説する。</p>	
	図書館施設論	<p>必修の各科目で学んだ内容を発展的に学習し、理解を深める観点から、図書館活動・サービスが展開される場としての図書館施設について、地域計画、建築計画、その構成要素等を学ぶ。図書館サービスとその背景となる図書館施設の関わりについて理解を進め、利用者にとって施設はいかなる意味を持つのか、物理的建築物としての図書館と、場としての側面の双方から図書館を考察する。さらに図書館サービスを行う上で必要となる施設・設備に関する基本的な知識-建築過程、利用事例、施設運用上必要となる留意点-等を修得することができるようすすめる。</p>	
	博物館概論	<p>博物館の基礎的な知識の習得を目指して、博物館の定義、種類、存在意義、役割を学ぶ。日本および諸外国の博物館の歴史と現状を学び、博物館の発展の歴史を知り、今後の課題を考察する。特に、市民と博物館はどのように関わらすべきか、博物館の社会的役割について考察する。また、具体的な自然史系博物館の活動(研究、資料収集・保管、展示、普及教育)を紹介し、その目的、実践、成果について分析・考察を行う。</p>	
	博物館経営論	<p>博物館経営に欠かせない組織や人材、経営手法・形態、連携などについて学ぶ。博物館は「収集・保存」「調査研究」「展示」「教育普及」の4つの役割をもつ。さらには、社会教育機関としての役割を果たし、地域社会にその存在意義を知ってもらうことも重要である。博物館を取り巻く環境が厳しさを増すなかで、博物館はどのような役割を担いながらマネジメントを行っているのかを、さまざまな角度から考察する。</p>	
	博物館資料論	<p>美術館から動物園にわたる博物館が取り扱う資料は、生き物資料を含め、多種多様であり、学芸員はその博物館が専門とする学術分野の専門的な知識と資料を取り扱う高い技術が要求される。この授業では、人文系博物館を中心に、具体的な博物館の事例を取り上げつつ、さまざまな資料の特徴を把握し、資料に関する法律、多種多様な資料の収集、受入、研究、保管、展示等に関する考え方や技術などについて学ぶことで、学芸員に必要となる基礎知識を身につける。</p>	
	博物館資料保存論	<p>博物館資料を保存するための知識を習得することを目指す。資料を保存する意義を学び、各分野の資料の特質や所在している環境条件を科学的に捉え、特質や環境条件に応じた資料の保存対策と保存環境を解説する。さらに、災害被害の予防や、資料の修復や対処についても解説する。また、地域全体を博物館資料と捉え、地域資源や文化財の保存、自然環境の保護と博物館の役割について考察する。</p>	
	博物館展示論	<p>博物館における展示に関する理論、展示の理念と歴史、博物館展示の諸形態について、欧米と日本の事例を通して学ぶ。また、美術館における事例を中心に、多様な展示を比較しながら、展示のコンセプトの立案、空間構成・施工・広報デザイン・カタログなどの具体的な展示の技術、博物館展示と社会との相互作用、展示にこめられた政治性について考える。これらの検討を通じて、博物館の展示機能についての基礎的能力を養うとともに、人類の遺産・歴史・文化・自然・科学が、博物館の展示としてどのように表現されるのかを理解することを目的とする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
自由 選択 科目	博物館教育論	博物館は従来の機能に加え、社会教育機関としてさらに積極的な役割を果たすことが期待されている。博物館のもつ重要な機能である教育施設としての機能に注目し、学校教育・生涯教育における博物館の果たすべき役割と機能、その問題点について考える。	
	博物館情報・メディア論	博物館は、展示による情報の発信のために、さまざまなメディアを利用する。一方で、博物館自体が、展示を通じて、さらには博物館全体として、社会に情報を発信するメディアそのものだともいえる。この授業では、博物館における効果的な情報の管理と発信を行っていくために必要な理念と技術について考える。	
	博物館実習	最初に事前指導において、博物館実習の目的と方法や、博物館の現状と課題を踏まえた上で、実習計画の設定と応募施設の選択を行う。次いで、現職の学芸員の講義を聴き、複数の博物館を見学する。さらに、自ら架空の展覧会の企画書とチラシを作成し発表する。最後に事後指導において、実習の報告課題を作成し、実習成果の発表を行う。	共同

学校法人 西大和学園 設置認可等に関わる組織の移行表

令和2年度

令和3年度

	入学 定員	編入学 定員	収容 定員		入学 定員	編入学 定員	収容 定員		
大和大学				→	大和大学				
教育学部					教育学部				
教育学科	190		770		教育学科		190	770	
初等幼児教育専攻		3年次	5		初等幼児教育専攻		3年次	5	
国語教育専攻			-		国語教育専攻			-	
数学教育専攻			-		数学教育専攻			-	
英語教育専攻			-		英語教育専攻			-	
保健医療学部					保健医療学部				
看護学科	100		-	400	看護学科	100		-	400
総合リハビリテーション学科					総合リハビリテーション学科				
理学療法専攻	40		-	160	理学療法専攻	40		-	160
作業療法専攻	40		-	160	作業療法専攻	40		-	160
言語聴覚専攻	40		-	160	言語聴覚専攻	40		-	160
政治経済学部					政治経済学部				
政治行政学科	40		-	160	政治行政学科	40		-	160
経済経営学科	80		-	320	経済経営学科	80		-	320
理工学部					理工学部				
理工学科	230		-	920	理工学科	230		-	920
数理科学専攻					数理科学専攻				
情報科学専攻					情報科学専攻				
機械工学専攻					機械工学専攻				
電気電子工学専攻					電気電子工学専攻				
建築学専攻					建築学専攻				
					社会学部				
					社会学科	<u>200</u>	-	<u>800</u>	学部の設置(認可申請)
計	<u>760</u>	5	<u>3050</u>		計	<u>960</u>	5	<u>3850</u>	
白鳳短期大学				→	白鳳短期大学				
総合人間学科					総合人間学科				
こども教育専攻	100		-	200	こども教育専攻	100		-	200
看護学専攻(3年制)	100		-	300	看護学専攻(3年制)	100		-	300
リハビリテーション学専攻(3年制)					リハビリテーション学専攻(3年制)				
理学療法課程	40		-	120	理学療法課程	40		-	120
作業療法課程	30		-	90	作業療法課程	30		-	90
計	270		-	710	計	270		-	710